都名所圖會

[illegible]
再刻
[illegible]

都名所圖會巻之四目錄

右白虎

大悲閣
となせの滝
法輪寺
帷子辻
牛祭図
梅の宮
茸がりの図
葉室西芳寺
天鼓森
久遠寺 光如上人墳
大原野春日
西行桜
椋社

大井川
小督塚
西行桜
安堵橋
木嶋社
梅津川
月読社
地蔵院
上野橋
大江坂
花の寺
せがいの水
西岩倉

渡月橋
臨川寺
桜がりの図
常盤社
地蔵堂
西院春日社
華厳寺
唐櫃越
桂川
時鳥聞図
朧清水
翁の瀧
三鈷寺

千鳥淵
有栖川
車折社
太秦広隆寺
海生寺
松尾社
衣手社
浄住寺
桂の里
峠地蔵
日野嶽
長岡都
釈迦嶽

善峯寺
業平母公塔
辯天社
唐橋
貞徳翁墳
法傳寺
琴弾橋
羽束師森
乙訓寺
揚谷観音堂
帰海印寺
観音寺
宗鑑古跡

小塩山十輪寺
朱雀権現堂
西寺古跡
吉祥院天満宮
地蔵堂
横大路 牛車図
鷲尾寺
向日明神
粟生光明寺
長岡天満宮
山崎
八大天王
関戸明神

在原業平塔
源為義塚
山伏塚
鳥羽里
こい塚
久世里
福田寺
真経寺
奥海印寺
小倉明神
離宮八幡宮
妙喜庵
谷観音堂

塩竈古跡 塩溜池
水薬師
松尾祭礼図
實相寺
下鳥羽恋塚寺
蔵王寺
板井清水
寺戸願徳寺
寂照院
圓明寺
宝寺
天満宮社


月輪寺
白石
祖師堂
時雨の桜
本堂
龍女社
龍女水


愛宕山
朝日峯
月輪道

愛宕山のやしろハ王城の乾ふして朝日嶽白雲寺と號す鳥居より
坂路五十町ありそのはじめに試の峠あり清滝川渡猿橋ハ燧権現を
十七町目にあり樒か原ハ此の麓ふして南星峯とハ乾にくこの嶺を
いふ鐵の華表の額ハ表を朝日山裏を白雲寺と書く 竹園良恕法親王の筆也

新古 降つみし高嶺のみ雪解にけり清滝川の水の白波 西行法師

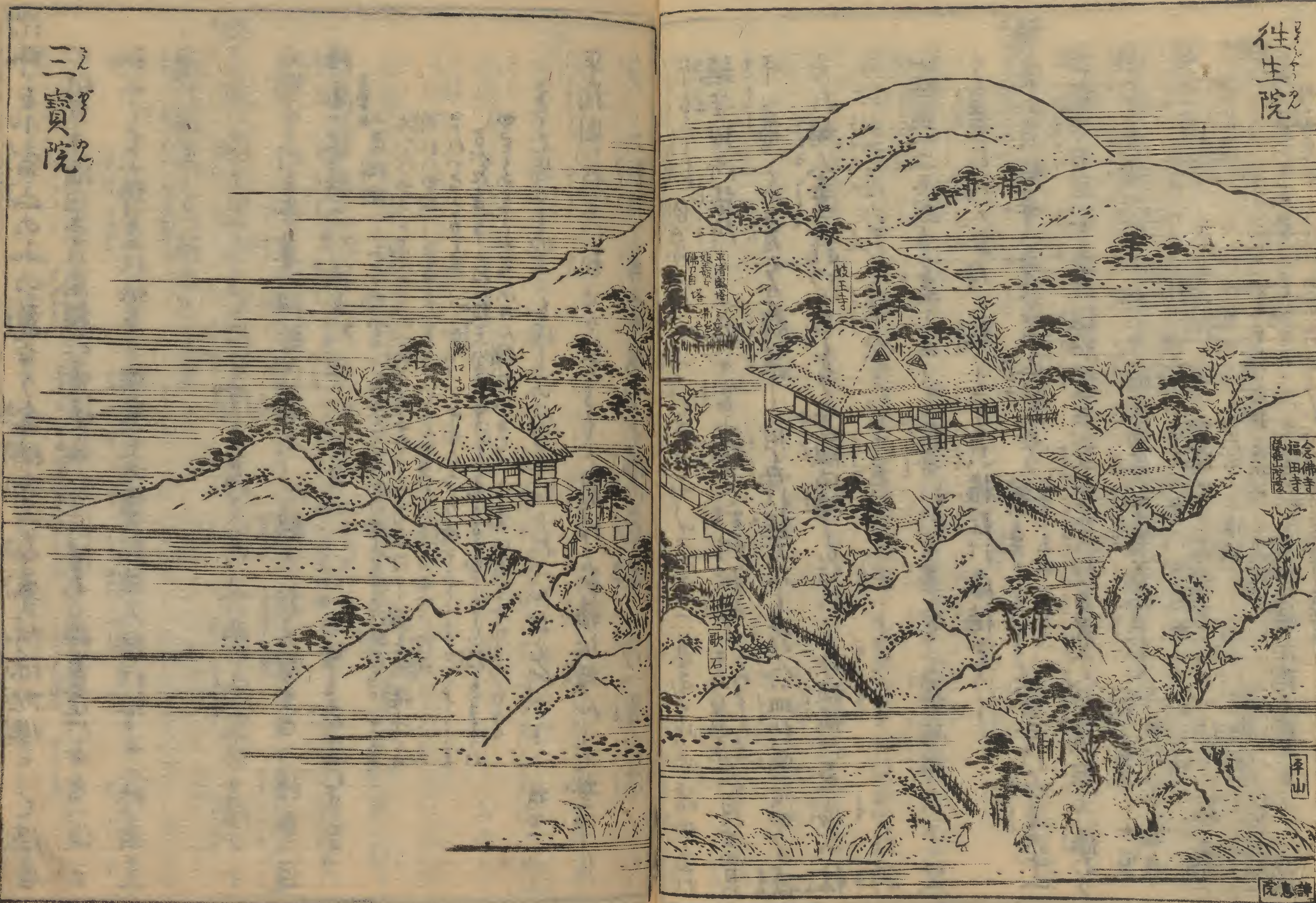
日 岩根こす清滝川の早ければ波折かくる岸の山吹 権中納言国信

堀川百首 時雨にハ白露ふれしもあたご山樒の原ハ色ハかハらし 顕仲

本殿ハ阿太子山権現にして祭所ハ伊弉冊尊火産霊尊を本地を
将軍地藏とし安置し帝都の守護神として火災を永く退のくる
久代ハ鷹が峯にありしを光仁天皇の御宇天応元年に慶俊
法師此山をひらきて鎮請し奉る 一説にハ大宝年日羅唐土の是界日本の[illegible]帝の御宇大宝此に三鬼ハ泉魔の大将と文武
元年役小角泰澄の両聖人此の悪鬼を退治せんとて清滝の幽谷般若の[illegible]にて霊験
を顕し愛宕山のいたゞきに黒雲靉靆き絶を両聖[illegible]黒き雲忽ち晴て白雲となる故に
白雲寺と号す其石座の中に地藏龍樹富樓那毘沙門天の五尊出現し給ふ
謂此尊像ハ甲冑を帯し将軍の形なり当社の建立ハ勅を奉

て和気清麿建立 以しるのしとぞ 例祭ハ四月中の亥日にして神輿二基あり嵯峨清涼寺に
鎮守の御旅所として野々宮に振く神供の御まいる六月廿四日ハ
千日参りとて宵より群集し月毎の縁日にも老人ハ皿竹輿にのりて杖
られ婦人童子ハつらなりて万仞の嶮しきをいとハず坂路の茶店に休
らふハ白雲目のあたりを横にあるひハ土器投けに興じて足の労を忘るゝ杵
山城国一二に双ぶる高山にして炎暑のおりも峯寒く道ハ嶮難なりといへ
ども常に詣人おほく賑しきも只権現の威徳ぞかし

鎌倉山月輪寺ハ愛宕の山腹にあり 鐵の鳥井より左へ下りて七十三町あり 当寺の本尊ハ十一
面観世音及安養尼祖師堂又ハ空也上人親鸞聖人月輪殿下の像あり
開基ハ慶俊法師中興ハ九條関白左大臣兼実公 此地に閑居し給ふ故月輪禅定と称す
龍女水 空也上人此地に幽居し給ふ時当山[illegible]より龍女婦人と化して法を授り忽成仏を甚報恩として此の山の岩窟より
水ハ清泉涌出[illegible]龍女今に増減なし 所々へ 時雨桜 堂の前にあり 親鸞聖人
然にて当山の用水とも便に遊女のやしろあり 小圓左遷の時兼実公名残を惜しみ給ひしに自作の像を[illegible]
時雨を今も流[illegible]のはなハ[illegible]



往生院
三寶院
平清盛塔
妓王妓女
佛乃自塔
妓王寺
念佛寺
福田寺
瀧口寺
歌石
平山

化野ハ小倉山の北の麓なり念仏寺の本尊ハ阿弥陀仏にして湛慶の作なり福田寺ハ南朝の帝後亀山院の陵あり諦息院の本尊ハ倶生神にして小野篁の作なり焔魔王の像ハ弘法大師の作なり又地蔵菩薩ハ満米上人の作なりとぞ

妓王寺ハ浄土宗にして往生院とよばれたる所にて西の山上にあり後世今の地にうつせし本尊ハ阿弥陀仏にして脇士ハ観音勢至なり清盛入道浄海の塔 祇王 廿一 祇女 十九 仏 十七 刀自 四十五 祇王祇女の母 の塔も方丈の南にあり

平家物語 入道相国いかにもかなふまじき由申されければ祇王ひたすら出べきにさだめられ一樹の陰にやどりあひ同じ流れを結ぶだに別れの悲しきならひぞかし ましてこの三年が間住なれし所なれば名残も惜しく悲しくてかひなき涙ぞこぼれける さてもあるべき事ならねば祇王いまはかうとて出けるがなからん跡の忘れがたみにもとや思ひけん障子に泣く泣く一首の歌をぞ書つけける

もえ出るもかるゝもおなじ野への草いづれか秋にあはではつべき　祇王

平相国ハ妓王に惑されしと寵ある家妓を軽んじて埜雉を愛し又朝権を恣にして仏の慈悲を蔑しが一首を遺しける

まことに後の錦の袂をまとひし衣にかへて仏も我身のうへの秋なるを悟りぬれば此方に来りて四人とも道心堅固に日を送りしとぞ

三宝寺ハ祇王寺の南に隣る さても往生院とよばれし本尊ハ阿弥陀仏又滝口入道横笛の像を安置す開基ハ良鎮上人也歌石とよばるゝハ門の前にあり

小松内大臣の侍士滝口時頼といふものあり又建礼門院の曹司横笛ハ容顔美麗にして倫ハ格別なれば滝口見そめて思ひをかけしが滝口の父茂頼是を聞て諫めければ滝口世を観じて出家しける横笛是を聞て尋ね来りしに滝口ハ逢ざりける後横笛ハ一首の歌を残し大井川に身を沈めしとか

梓弓そるを何か恨むらし引とむべき心ならねば　横笛

是ハ当院の説にして此所の石に彫刻せり平家物語ハ此説に異りて滝口ハ嵯峨を出て高野へ上り清浄心院に移り住ける時横笛も尼となりて一首の歌を遣しける時滝口入道一首の返歌を遣す

そるまでハうらみしかども梓弓まことの道に入ぞうれしき　滝口

そるとても何かうらみん梓弓ひきとゞむべき心ならねど　横笛

其後横笛ハ奈良の法華寺にありけるが其身ハ病てはかなく成りしとぞ

二尊院（にそんゐん）

古今

夕月夜小倉の山に
啼鹿の
声の内にや
秋はくるらん

貫之



小倉山二尊院は愛宕の南にあり宗旨は天台真言律浄土四宗の兼学なり

風雅　小倉山麓の寺の入相にあはれねさむるかなしかりけり　俊成

続後撰　小倉山ふもとの里の夕霧に宿こそ見えね衣うつなり　順徳院

新千載　夜よりは暮ぬと立るし小倉山やまのすそ野に鹿ぞ鳴なる　後京極右大臣

新古今　小倉山ふもとの里に木の葉ちれば梢にはるゝ月を見るかな　西行

當院の本尊は釈迦阿弥陀の二尊立像にして発遣来迎の相をあらはせり念仏堂には法然上人の影を安置す中門の額は後柏原院の宸筆にして小倉山とあり本堂の額二尊教院は後奈良院の宸翰なり　勅額の額は小野道風の筆にして二尊教院と書し也四足門にかゝりし額に門前より夜々霊蛇出て額の文字を嘗る是を防がん為に不動の像を安ぜられしかどもいまだ止ず正信上人の頃の額を教んとあにてはかりし円頓戒の血脈を多く額に書しおかるゝ故に千重の白蛇とゞめけたり星霜を経て竜女成仏の証なりしとて其の後什宝として今にあり此の傍の弁才天の社は當院の鎮守にて諸女と勧請したるなり

當院は嵯峨天皇此の野に行幸の附るしびある勝地なりとて此所を点じ給ひ華台寺なりしを二尊教院と号せられしより連綿して無雙の霊場となる其菩提寺なりし醍醐帝の皇子兼明親王此かくれに山荘を営み雄蔵殿と称し其後星霜をへて中興は法然上人閑居しのひ元久元年十一月七日一宗模範の式七ヶ条の起請文を制せられ自筆を染て判形をすへらる當院第二世信空上人をはじめ西山上人等百八十九人起請にはせるおのゝ自筆に名を書けり　熊谷二郎直実も九十人目に出て法名を蓮生と書しるされ又神変の舎利を安置あり　法然上人此舎利をつたへて式を作りて曰仏子牟尼の遺教にしたがつて浄土の一門を信じ毎日七万遍の念仏を修して既に多年の星霜を積む次に後の望　いまそのことありしは釈尊の恩徳なり報謝をなすとぞいはれり

足引の御影　其伝に曰月輪禅定殿下法然上人に御帰依の志深く尊敬のあまり上人の真影を写さんと仰られしに上人かたく辞して退出せらる其後上人石清水に入沐浴ありて衣を著し念仏したまへる休息の間画工法眼宅磨為久ありて簾中より密に窺しめ其形相をうつさせらる丈六の坐しありて一方の足先出たるまゝなりしの外は書せり上人参りて来り給ひしに殿下此寿像をかけて開眼供養をぞ宣ふ上人驚きて此足の出たるは平懐の形なりとて持念せられしかば忽然として其足引れ坐

せしは姿よき足偏に上人は奇特又は繪師は名譽なりとて人々奇異
のおもひをなしにける足より足引の御影と稱しける
法然上人は第二世正信房湛空ハ德大寺左大臣實能公の孫也幼けれ
眞言を修行し志深かりければ淨土門に入って當院を再興し土御門後嵯峨院
二代の國師となり寛喜上皇御歸依れ勅命に依りて御遺骨を當山の御
塔に納め奉る 當山西の山上にあり 三世正覺上人も後深草院龜山院後宇多院伏見
院の國師たり當院の縁起は伏見宮貞敦親王西三條公條卿の兩筆也
外題は後奈良院の宸翰なりて画は土佐光信なり大聖文殊の三尊傳
教大師の五條袈裟弘法大師の七条衣皇慶阿闍梨の袈裟あり
此袈裟は護法神現れて天竺無熱池に行て濯ひし也此太京に袈裟石あり 其外五鈷等伏見院より御寄附
として當院の什寶なり
黄門定家卿の山荘といふ旧地は佛殿のうしろの山腹にありかの卿より
以前當院諸堂魏々として後世小倉山に移りて号るなり 定家卿の山荘此下に委し

厭離菴
定家卿古跡



檀林寺といへるハむかし檀林皇后の草創也これを嵯峨の御堂と称す唐の義空開基也
亡廃して此地に浄金剛院を建る今ハ二尊院の塔頭なり
浄金剛院の鐘ハ又黄鐘調なりとかや
長明神のやしろハ二尊院大門のまへなる祠なり宰る所ハ檀林皇后の髪を
とぶらひ侍るよし又日裳宮ハ此南二町ばかりにあり皇后の継孫をまつるといふ
裏柳の社ハ大門のまへより中院町にあり上衣の散りし所なりとぞ檀林
皇后嘉智子ハ嵯峨天皇の寵愛にして西施毛嬙にもまさる美人也
薨じ給ひて後恋慕愛執の思ひを離散させんとの遺命によりて屍を
嵯峨野の東に捨たまふ其屍散りし所にやしろを建てまつるなり
しとぞ

西行法師の庵の跡ハ長のやしろの南にあり

我ものと秋の梢をおもふかな小倉の里に家居せしより　西行法師

車僧の塚ハ二尊院のまへ藪の中に一堆の所ありむかしより車僧の塚と称す



京極黄門定家卿の山荘あり 此は時雨亭と號る舊跡とて傳ふにあり

此卿の詠歌によりて人かすき因ふすゆへそ後人名付て紙かと見えたり

後拾遺

いつはりのなき世なりせば神無月たかまことより時雨そめけん　定家

此うたを種として謡曲を作したり 小倉の山荘といふは清涼寺西の門より

時雨亭も是より出て実あるにやあらん

二尊院までの道二町ばかりの民家ある所を中院町といふ 愛宕山へ行道

院あり今絶て此半丁ほど入る細道あり竹林の後にかれ門ありて東に向ふ

所の名とせり

にあり後に厭離庵といふ入門の内に柳の水といふ清泉あり草庵の

跡は西のかたなる所をいふなり 西南は高くして中頃へかけて愛宕大岩院

砥礪を出すなり

の領にして房室などありしか今は破壊して纔にその跡あり

禅僧などが住めり

黄門此山荘にてよまれける

新古

小倉山しくれの頃の朝なさなきのふはうすき四方のもみち葉　定家

續古今

小倉山ふもとの里に家ゐしてかさねも袖のくちぬへき哉　同

新古

忍ばれんものともなしに小倉山軒端の松は馴て久しき　同

明月記

彼記に曰 文暦二乙未年五月廿七日己未 朝天晴 自不知書事 染筆中院障子

色紙形 故予可書由彼入道懇切 雖極見苦事 愁染筆送之 古来人歌

各一首 自天智天皇以来及家隆雅經卿

小倉山百人一首といふは定家卿の作にて古今より新古今撰集の歌黄門の心にかなへる百首を

撰をさるん 又一説に唐の勝子京が岳陽樓に詩賦をかけし事ありとて 又道雅三位の八条の別荘に

為家卿の墓は厭離庵の前畠の中にあり 此ゆへに中院大納言と称す

續後拾遺

小倉山陰れ庵はむかしへもせく岩ねの苔のしたれやさは　為家

玉葉

住そめし跡なりせば小倉山つくる老の身を隠さはや　同

定家身まかりて後七年の佛事とての家にてよみ侍り時

名のみして残る秋のさひしさは白露もさそふ人の袖ぬれ　同

玉し

なかれそもうへしまつにそさゝれける老の露かつそむける　入道前太政大臣

下冷泉宗家卿かりありしを立らしき石碑をたつ

中院入道殿 融覚 建治元年四月廿九日薨すと記されたり

定家卿為家卿の父子の旧跡此地に決せり是等を證とすへし


清凉寺
阿弥陀堂
元智院
方丈
聖天
本堂
薬師堂
五大堂

五臺山清凉寺ハ小倉山の東にあり 嵯峨釈迦堂と称す
本尊ハ大聖釈迦牟尼佛の立像にして長五尺弐分天竺毘首羯磨天これを作る
脇士ハ十大弟子の立像共に厨子に安置す 東西の壇上にハ文殊普賢を安置す
抑此尊容ハ三国無雙の霊佛にして釈尊在世におはしまして生身に写せる像
なり 如来の御母摩耶夫人釈尊を誕生ましまして後七日に薨じたまひ忉利
天に生れ給ふ 釈尊成道ましまして祇園精舎より忉利天に登り御母に説法し
たまふ事一夏九旬の間なり 此時四衆の輩釈尊を見奉らざるを憂歎す
なかにも優塡王ハ渇仰のあまり尊形を見奉らんとて歎き給ひ 香木赤
栴檀をもつて天竺毘首羯磨にあつらへ目連尊者の神通をもつて佛の御
相好を見せしめ尊容速に成就して祇園精舎に安置せり 釈尊安
居の御法おはりて本土に帰り給ふ 其時木像ハ精の御形をあらはして生身の釈迦を
迎ひ給ふ 釈尊木像に宣ふハ 涅槃遠からず 汝末世の衆生を化度すべ
しと告給ひて祇園精舎に入給ふ 其後年を経て唐土に渡り
宋の代に至りて本朝一条院の御宇永延元年南都東大寺の沙門奝然法橋入宋し
将来す 唐にて霊告を蒙りて此尊像を感得し奉りて帰帆し同年八月十八日
太聴に達し伽藍を建立し清凉寺と號す 以上縁起の大意
阿弥陀堂ハ棲霞寺と號す 嵯峨帝の皇子融大臣の営みし棲霞観を改めて寺とす 本尊ハ阿弥陀如来 [illegible]
又其されと影像を造り給ひて 五大堂 [illegible]
西の弁に安置す [illegible]
動大威徳軍荼利 二重塔 本尊ハ多宝佛を安置す 二石塔 [illegible]
の石塔を安置す
八宗論池 弘法大師此池の汀にて諸宗の 槍掛桜 池の傍にあり [illegible]
僧と対論し給ひし所なり
此桜といふ 四ッ足門 西の門をいふ [illegible]
[illegible]
当寺の仏事
大念佛 毎年三月五日より十五日まで 圓覚上人これを始む
御身拭 三月十九日 [illegible]
鐘古
鷲の山二たびこゝに [illegible] の月
寂蓮法師

大澤の池は遍照寺の艮にあり菊が嶋といふハ池の中嶋天神のやしろあり

此中へ嵯峨帝 庭湖石 此石ハ池中にありむかし嵯峨院ありし時巨勢金岡が建しとなり

新古今 大澤の池のけしきはふりゆけどかはらずすめる秋の夜の月　俊成

大沢の池の玉もの水かくれに蛙なくなり五月雨の頃　康光

五所明神の社ハ大沢の西にあり名古曽瀧ハ其ほとりにあり むかしハ此池に瀧殿ありと兼好が家集にしるせり

拾遺 瀧の音ハたえてひさしくなりぬれど名こそ流れてなほきこえけれ　大納言

小倒といふ所ハ桜の雙樹あり　今ハ人家多し

大覚寺宮ハ真言宗にして仏殿にハ五大尊釈迦本尊とす弘法大師の作なり 嵯峨天皇の故宮を精舎として

ともに開基ハ恒寂法師 淳和帝第三の皇子なり 代々法親王御住職したまへ

大覚寺と号す 三代実録にみゆ 菖蒲谷といふハ大覚寺の北にあり 小松中将惟盛卿の君達六代御前の母の方姫君をともにかくれしところなり

八角堂ハ大澤の西にあり後宇多院の陵なり 内に五輪の石塔あり昔ハ堂の形八角なりし今も所あり

其ほとり 桐澤池 広沢大沢の中にあり 長刀坂 其北にあり 僧正遍照の旧跡 此所によりふるく古書にみえたり

新續古 ふる跡ハ秋のさかりし瀧のねにかりし源氏の名ぞながれける　忠定

大澤池 大覚寺

拾遺 ひともとと思ひし菊を大沢の池の底にも誰か植ゑけん　友則




廣澤池
遍照寺旧跡
後拾遺
ひろさはの月を見てよめる
住人もなき山里の秋の夜ハ月乃光りもさひしかりけり
藤原範永
遍照寺山
音羽山
座禅石
八角堂

廣澤池ハ大澤れ巽あり寛朝僧正此池をつくりあそばされしとなん

風雅

廣澤れ池の堤の柳かけみどりもふかく春雨ぞふる　為家

待賢の尾廣沢にまかりてよみ侍りける

後拾

山の端に隠れもなくて秋の月いく世の影も宿しけり　藤原範永

新千

いにしへの人は汀に影たえて月のみすめる廣澤乃池　源三位頼政

中秋の月見んと都下の貴賤池の汀に臨んでよもすがら盃をめぐらし千里一致共にしてくまなき空にかゝる月も宿りぬ廣澤は池と称しも今さらに物凄しく風は繊雲を掃て浄く家は月明に降りて寒し謝荘は月賦を作り庾亮は南楼に登る和漢中秋の月の賞をなす古今に変らず

遍照寺山を池の乾に向てうしろにして寛朝僧正の創建なり

真言宗嵯峨遍照寺の旧跡は山の麓にあり本尊は十一面観世音

赤不動共に弘法大師の作　今池の裏村の朝観堂に安置す

坐禅石　遍照寺山の中腹にあり寛朝の坐禅石

登天松　はしさ山の麓にあり池の汀なり寛朝此松の梢より天に登りしといふ

佐古曽の水　池の西のかたにあり

児のやしろ　遍照寺より池の西北のかたにあり

観音島　池の乾にありいにしへ遍照寺ありし時池の中に橋ありて観音を安置す

児ケ石　寛朝僧正の常に侍る児童ありしが寛朝登天の後悲しみて終に此池水に身を投て死す其の霊を祭りけり　坐禅石の下にあり寛朝坐禅のとき児童此石に頭をもたせて眠るとなん

釣殿　児のやしろの傍池の汀にあり

釣殿橋　池の西かしの樋がゝりにあり

大道法師足形池　広沢の巽三町ばかりにあり

屏風岩　広沢の巽此所に現はるとぞ

音頭山　鳴滝の北の山にあり　足形池の西かしの山路にあり

千壺の井　鳴滝の北にあり此山に入れば井あり

さゞれ石　鳴滝道の北にあり此山に入るとぞ

千代の古道　広沢のこなたの一町ばかりにあり

千代の古道は嵯峨へ通ふ細道なり　南の山にあり

千代の古道は名所にあらざるよし名所の抜書に見えたり又定家卿為家卿をはじめ嵯峨の縁合に古歌あまたありとの名所にあらざるといふも其謂あるべし

帯かけ池　広沢の西かしこ歌の名所ありて人をいましむる所あり昔あるゆゑ帯かけ池といふ

いと深くて此池の霊帯と化して人をまどはしけるとぞ

まつかげ谷　的野　化翁洞　野の依　此辺にあるよし其所さだかならず

源草里　清涼寺の西かし蓮台今八ツ野といふ土器つくりしを源氏の祖を源菜といふとぞ



新古今

下紅葉かつちる山の夕しくれぬれてやひとり鹿の啼らん

家隆

條峯五老勢相連
此鹿来従碧洞邊
有野麋人不見
一生長飲白雲泉

賈島

嵯峨野は大覚寺清涼寺およひ嵯峨よひ天龍寺法輪寺等
迎ふ下嵯峨とよべく野々宮は真中途なりいにしへより閑静の地に
して故人も多くすみたりし秀詠は和歌物語に遑あらず涼順も此
地に住んで紫藤の賦を作り棲霞堂くは僧侶の宅となりぬ又兼明親王
しは文雅にのせたりまたは舊野山しも田猟の地なりしく嵯峨帝始
て御狩ありしくより文徳清和陽成の三帝はおさ／＼行幸ありし
しが光孝帝かさねて興しあひ御幸ありぬあるひは此野へ女人
を遣されしく松虫鈴虫をとらせ給へば其しれ野は虫屋の
遊りあまたの虫を撰く奉られり嵯峨帝は西院の御紙書にて
く日本三年の第一なり又詔文にも達しの人なりと文華秀麗
はこれよりも御位を淳和帝に譲らせ給ひてすまゐする離宮なり
かくれ嵐嶺の白櫻亀緒の落月に敵あるは[illegible]乃
世捨人も此野は女郎花かるかやしたて[illegible]馬より落て

よめり

古今序
名にめでて折れるばかりぞ女郎花我落ちにきと人にかたるな　僧正遍照

玉葉
さが人の草の名ごとにしもあらぬ秋はさらに四方の白露　順徳院

長久二年八月松尾社行幸ありしに斎宮の女房車
に草の花枝かざして嵯峨野につくぞうへに立ならべて物見
侍りける遊猟のつかさの中に侍りけるが詠み
車のをとほりにうちよりてよみ侍りける

撰古
うちむれて[illegible]花落りて色かはく見ゆる嵯峨の野べかな　中納言資仲

新千
絶せじな後はさらなる末までもこの嵯峨の流れはたえまじ　亀山院

同
うつりゆく世のさかりは秋の草葉にも時雨も知らぬやそののべ　法皇宸翰

嵯峨十景

叡岳晴雪　難瀬飛瀑　遍昭孤松
愛宕雲樹　五臺晨鐘　幡山霊社
嵐嶺白櫻　仙翁夌浪　亀緒落月
雄蔵紅楓

野宮は小倉山の巽なる林の中にあり悠紀主基の両宮ありて神明
黒木の鳥居小柴垣はいにしへの遺風なり伊勢太神宮へ
斎宮に立せ給ふ内親王此所に三とせ籠り給ひて潔斎し
給ふ斎宮のはじめは垂仁天皇の御宇皇女倭姫命なり
例によりて九月上旬吉日卜定して伊勢太神宮へ
向ひ給ふとなり後鳥羽院の御宇に此事絶ぬ　野の宮の別れなり

新古　斎宮にて庚申しけるに松風入夜琴といふ
題をよみ侍りける
琴のねに峰の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけん　斎宮女御

拾　松風の音に乱るる琴の音をひけば子日の心地こそすれ　仝

続古　雪のあしたに野の宮にて
榊さく宗のかきねのかたへに積りける雪は白ゆふ　入道前太政大臣

玉葉　野の宮より出侍りて
さらじな八十瀬の波はかけもせで渡らぬ袖のぬれもこそすれ　斐子内親王

常寂光寺は野宮の西にあり法華宗なり開基は日禎上人なり
本尊は釈迦多宝二仏也定家卿の社は南の山上にあり　式部卿家の山荘のうち
これ為舎院より小督局に賜ふ車琴といふ名琴あり後代に至りて
金吾秀秋の手にありしを当寺に寄附せしなり



常寂光寺



芹川は野宮のうしろを流れ末は大井川に落る小川なりむかし芹川殿とて御所ありし亀山院御幸ありし所とぞ　芹川当国の中に二ケ所あり和名にハ拝く
芹田の芹川を詠を

歌詰橋は天龍寺のまへ芹川の流れにかゝる橋なり西行法師此所を通りたまひしとき寿量品を読誦しおはれば経首あり後に西行庵にとゞまりしより號るとぞ

薄馬場は天龍寺の東康王院の前にあり　いにしへ橋氏薄殿これに住居　今は辻子といふ

亀山は天龍寺の西なる山也　亀の甲に似たる也　號る　後嵯峨帝亀山帝離宮跡はいとかみ住せ玉ふ旧跡なり

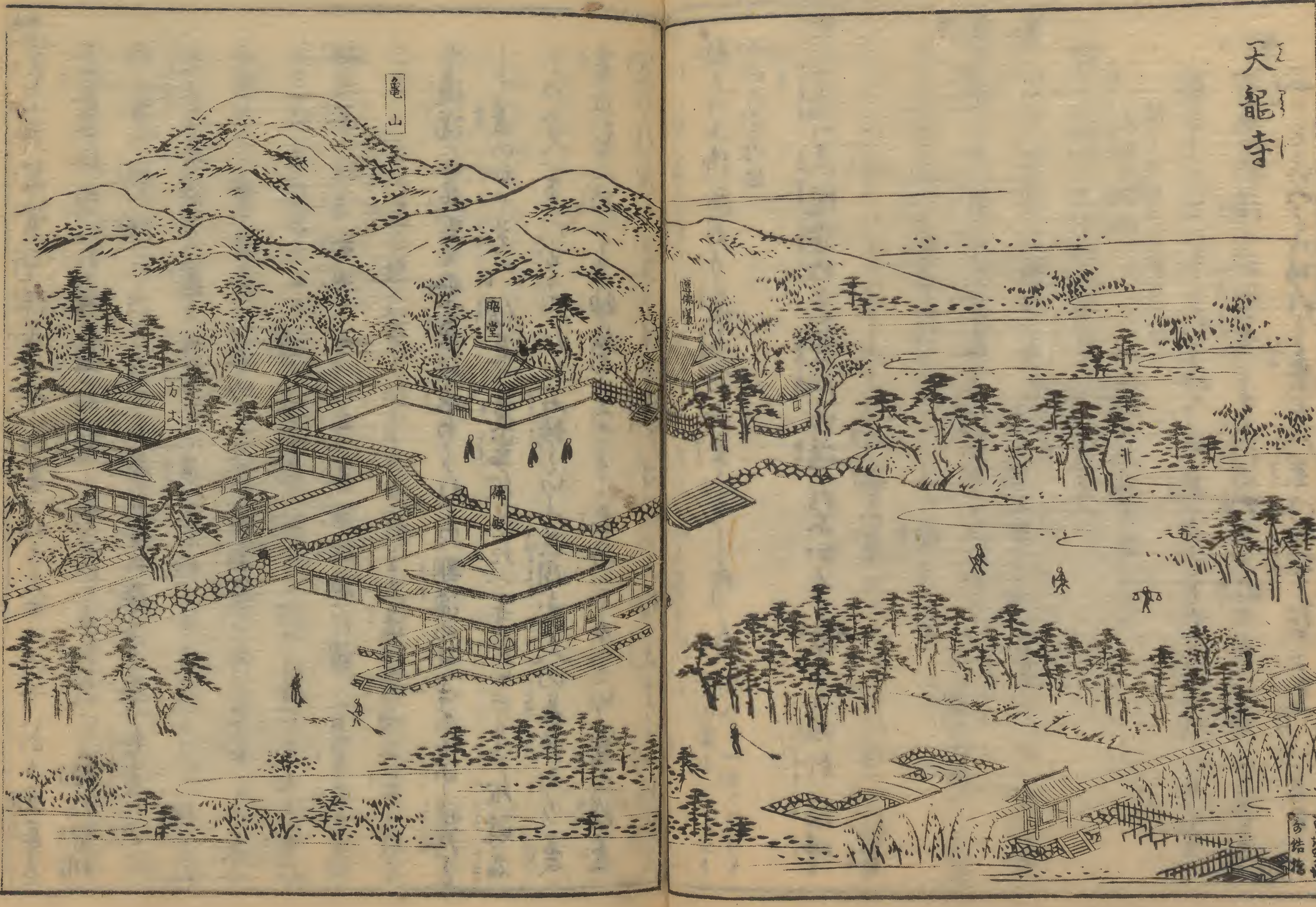
続古　亀山の仙洞によしの山の桜をあまたうつしうへ侍しか花さかりなりけるを

春ごとに思ひやられしみよしのゝ花はけふこそ宿に咲けれ　太上天皇

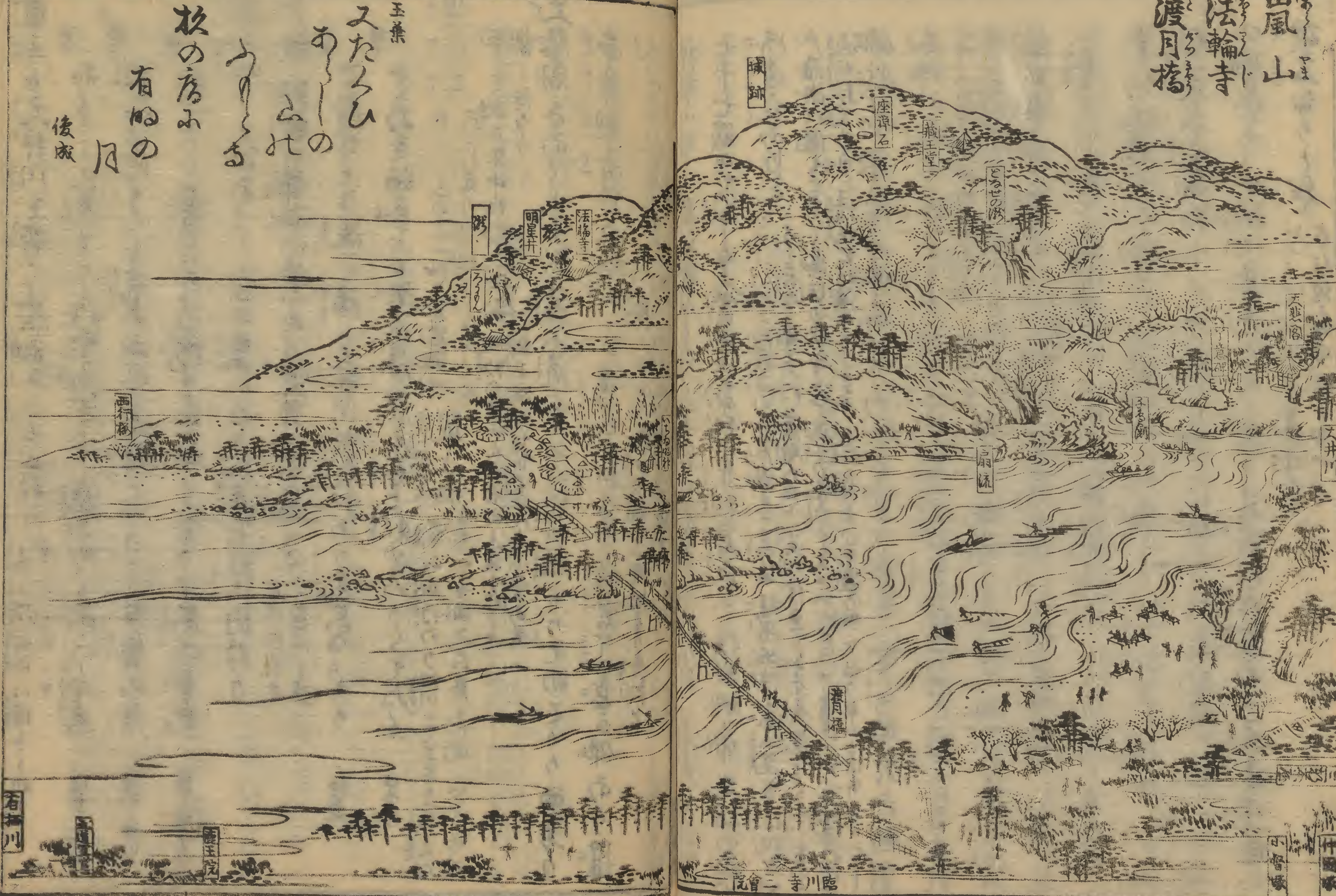
同　かめのをの滝つ河波ちりそふ千代の数よむ秋の夜の月　大納言通成

新千　子日するいづくはあれど亀のをの岩ねの松をためしにぞひく　為家

天龍寺



霊亀山天龍資聖禅寺は五山の第一なり大井川の北にあり開基は
夢窓国師諱は智曤又疎石と號しあるひは木訥叟とも称す勢州
の人なり姓は源氏にして宇多帝九世の孫なり母は観音に祈つて
金色の光西より来りて呑むと夢みて妊し十三月にして誕生れ
四歳にして母に別れ九歳の時平塩教院に至り出家し十歳に
して法華経を七日に誦し母の恩に報じ其のち母の死屍九変の
相を画て独坐観想し十八にして慈観律師に禮し具足戒をうけ
三年の間顕密の教をならひしかれども大道の發明に足らずとて
て道場を建百日聖夢を求められしに期満の日夜中恍惚と
して夢の如く唐へ一僧来りて夢窓を導き一寺にいたる疎山
といふ又一寺に至る是を石頭といふ其内に一人の長老あり夢
窓をむかへて一軸をあたへてよく奉持しよといふと覺て後夢
窓おもむろに是をひらきみれば達磨半身の画像なり是より志を定め
禅観に帰し名を疎石とあらため字を夢窓といふ観応二年九月三十日
七十七歳にて寂しす当寺の本願は足利尊氏公 後醍醐帝追福のために
御建立ありし也 いにしへは此地に櫻林あり荒廃して其後後嵯峨院亀山院等仙洞とし
戸難瀬は瀧もさかりて御殿の前にかへて画工の筆力にもをよびがたし寝殿の西には薬師院東に如来寿院とてまします小倉の山
兼明親王のすみ給ひし清浩公は諸によりて定まる山荘に移り給ひし事も此所なるべし又中書王の御鎮座は此寺なり
佛殿は本尊は釈迦仏脇士には文殊普賢を安置す壇上の脚には天照皇
太神は銘あり梵天王帝釈天達磨臨済百丈の像は左右の壇上に安置す
いにしへの佛殿を普く皇宝殿と號す堂 昭堂は聯芳と名づけて開山の像尊氏の
前に其跡あり佛殿はむかしの法堂なり これは尊氏公の念持佛なり 又堂内に開山七朝國師號の勅書七通
像地蔵尊を安置す
を掛方丈の庭は夢窓國師の作にして池を曹源池といふ書院を集瑞軒と
名づく塔頭多宝院には後醍醐帝の御廟あり同金剛院の開基は夢窓
は上足普明國師にて光厳院帝の御廟あり同真乗院は笑山和尚
の開基にして細川常光の墓所あり其前に石盆あり是亀頂塔の
礎石なりとぞ いにしへ天龍寺に九重の塔あり これを亀頂塔と名づく


嵐山（あらしやま）
法輪寺（ほうりんじ）
渡月橋（とげつきやう）
玉葉
またくひ
あらしの山の
ふもとてら
杉の庵に
有明の月
俊成
城跡
座禅石
蔵王堂
となせの滝
大悲閣
大井川
法輪寺
明星井
渡月橋
有栖川
臨川寺
三會院

嵐山ハ大井川を帯て北ふ向ふてる山なり　亀山院吉野の桜をうつされし

新千　あらし山是もよしのやうつすらん桜にかゝる瀧の白糸　後宇多院

新古　おほゐ河ゆく人も嵐の山ならぬに独ぞいりし有明の月　法印幸賢

続千　あらし山麓の花乃梢まで一つに見ゆる峯の白雲　前大納言実氏

櫟谷やしろハあらし山の麓にあり松尾七社の内なり

戸難瀬瀧ハ櫟谷の西にあり大井川に落るなり　大井川の一名とせ河とも云

玉葉　となせより流る錦ハ大井川筏につもる木葉なりけり　後徳

続千　岩ねを洗ふ瀧瀬の月影もさぞ秋になりけるなる　定家

坐禅石　あらし山の上にあり夢窓国師常に来り坐禅しけるとぞ

嵐山城跡　峯に城郭あり細川右京太夫政元の家人香西又六郎元盛の築して永正年中に築く所なり

蔵王谷　城跡の西にあり吉野の蔵王権現を勧請して安置し今に堂あり

大悲閣ハあらし山の麓に道ありて渡月橋より七町ばかり西にあり本尊観音の立像にして恵心の作なり角倉了意の碑あり羅山子これを撰ぶ　了意ハ大井河の巌石を截て丹波より舟筏を通じ材木の運送自由す

智福山法輪寺ハ渡月橋の南にあり真言宗にして本尊ハ虚空蔵菩薩也坐像なり　道昌法師の作　脇士ハ明星天子雨宝童子なり

続千　受つけハ猿のさけびも嵐山宮に吹へそをふる旅の跡　高道

当寺ハ天平年中の建立にして葛井寺といふ　天慶の頃空也上人こゝに住て当寺を修造し念仏常行堂を建

中興の開基ハ道昌僧都姓ハ秦氏にして讃州香河郡の人也弘法大師に真言の密法をうけ虚空蔵求聞持の法を修せんとて此寺に一百日参籠しけるに五月の頃皓月西山に傾き明星東天に出る時閼伽の水を汲むとて光炎頓に耀て明星天来り袖のうへに来現し忽虚空蔵菩薩と現じ給ふ縫のごとく染るがごとく数日を経しかども真体滅せず是生身の尊影なりとぞ道昌則虚空蔵菩薩の像を刻み袖の像を胎内にをさむる此時弘法大師を請して開眼供養しける是当寺の本尊なり貞観十六年に伽藍を改て法輪寺と号す

落星井　又明星井ともいふ本堂の南にある井なり此ほとりに社を建て明星天子を祀る　中古ろ道昌此井にて垢離しける頃に星降りしと云

東橋　楼門の前にある橋なり

参籠堂　都の工職人此所に参籠て一七日断食し此水にて垢離し本尊に智恵を祈り近年断食の事つとふまゝあり


古今
花さかりに京を
見やりてよめる
見わたせば
柳桜を
こきまぜて
都ぞ春の
錦なり
ける
そせい法師
骸骨のうへを粧て
花見かな
鬼貫

大堰川の水上ハ丹波より流れ行く水尾川清滝川に落合ひ猿飛龍門瀧
大瀬等の名ありてあらし山の麓を帯し渡月橋を経て末ハ梅津桂の里
のながれを流れ行く淀川に落る

新古今　延喜の御時大井川に行幸侍りける日　坂上是則

かげさへに今ハと菊のうつろふハ浪の底にも霜や置らん

拾遺　大井河川辺の松に事とはんかゝる御幸やありしむかしも　貫之

同　色々の木葉ながるゝ大井川下ハ桂の紅葉とやみん　忠岑

此河の流れハ〇に清らかにして千代に一度すむ水の黄河にハ引かへ下に
筏のかず〳〵なるハ遠近の騒人扁舟に棹さしめぐりまうれ岸さへ乃岩
間によせ来る波しらぬ水もなさこそ抑又渡瀬を瞰て緡をたれ
あり水上に踊る若鮎の鉤を争ふて牽動らる楽み小石がちなる所へハ網を
投て夜に入るまでも猶あかぬ凛々たる河風に暑を忘れ弥増の興に乗じて
月に歩し帰るも多し続文粋にハ天下の勝地ハ大堰川に過ぎたるハなし
嵯峨中の名区ハ嵯峨野にしくハあらじとかや右大臣師房卿も宣ひしと

渡月橋ハ大井川にありて法輪寺へ渡る橋なり一名ハ御幸橋法輪寺
橋ともいふ

風雅　大井河はるかに見ゆる橋の上に行人すごし雨の夕暮　前大納言為兼

小督桜ハ大井河の北三軒茶屋の東桜の中にあり小督局ハ桜町中納言
成範卿の女禁中一の美人にてびハ琴の上手なり高倉院の御寵妃
なりしが平相国清盛に怨れて此嵯峨野に隠る弾正仲国ハ勅を蒙りて
寮の御馬にのりて明月に鞭をあげ西をさしてぞあゆみける抑も此
山里と詠じたる砌さびしき秋の夜の空にてしなく尋めぐりしに
亀山のあたりちかく松の下むらあるに幽に琴の音聞ゆ是なん仲国さそ
さぞと嬉しく門をたゝき入て御文をまゐらせて御返事を給はりて
帰りまゐりしに主上ハなほゆふべの御座にましませたまひける　くハしくハ平家物語にあり

千鳥淵ハ小督桜の西弐町ばかりに巌あり　これを身投石といふ　淵ハ南の岸のかたにあり

横笛ハ滝口に離れて此所に身を沈め由盛衰記にみえて遂をあふくり　平家物語にくハしく

西行桜 法輪寺の南にあり西行法師此所に住て桜を愛し號を今の證... 西行田といふ字有此邊にあり宗祇法師此所より住し申傳る事なり

霊亀山臨川寺は渡月橋の東にあり禅家十刹の第二なり

三會院は本尊は弥勒佛にして坐像也佛殿の額 三會院 足利義満公筆

しかるに此地は舊亀山法皇の仙居にして建武二年十月後醍醐天皇

より開山夢窓國師に賜ふ 當寺の庭は夢窓の作なり

鹿王院は臨川寺の東にあり禅宗にして十刹の佛殿は本尊は釋迦佛

脇士に十六羅漢を安置す運慶の作開基普明國師の像尊氏公の像は

右の壇上に安置す當寺の本願は将軍義満公にして至徳元年の建

立なり什寶に佛舎利あり 傳に曰鎌倉将軍実朝公の霊夢によりて宋國へ渡り...とぞ然るに佛舎利を傳来し相州の大慈寺に安置す其後夢窓は弟子普明國師に嘱す

後光厳院帝の時夢窓國師に勅して禁裏にありとぞ

今當寺にあり毎年十月十五日舎利會を修す

車折社は下嵯峨材木町にあり 五道冥官降臨の地なりとぞ一説には清原真人頼業の霊廟といふ此所を車折といふ...

その昔...牛車...此社に...家に...

有栖川 材木町の西にありより流る 齋宮 有栖川の辺り人家の北側にあり

千載 千早振いつきの宮の有栖川松とともにぞかけはすむべき 京極前摂政

帷子辻 材木町の東にあり上嵯峨下嵯峨太秦常盤廣澤愛宕等の別れ道なり 檀林皇后の骸骨を野に捨しより帷子の辻といふ

所也

安堵橋 帷子辻の西にありむかし清涼寺の釈迦如来赤栴檀の香比叡山に薫じ大衆大きに驚て嵯峨に奔る此所にて尊容に遇ふて安堵す

是より名づけしとぞ 甲塚 安堵橋の北にありむかし火の雨降りし時 油掛地蔵 橋の西にあり...

常盤社 ...此社の下に石佛の乙子地蔵 杜の西にあり...毎年七月廿四日地蔵會あり

阿弥陀佛と安置す

常盤墓 地蔵堂の傍源光房の庭にあり牛若丸の母常盤御前也 里人此所を墳墓といふ

拾遺 紅葉せぬときはの山に住鹿はおのれ鳴てや秋をしるらん 能宣

新古 まきの...ときはの里は住人さへや面かはりせぬ 土御門院

玉葉 深くゆるときはの杜の楮よりあきを秋の色はかはらざりけれ 忠定

新後 秋露のきえなくときはの杜の色深く常も秋をみんとぞ 定家

古御所 常盤の東にあり八条女院此所に住給ひし御室の常盤殿と称す 藤木 社の東にあり 住し旧跡なり


太秦
廣隆寺
太子堂
桂宮院
地蔵堂

九月十二日

太秦牛祭

聖徳太子はじめて執行したまひ祭文は弘法大師の作りにてあまたあり今に傳へ侍る



太秦廣隆寺は洛陽二條通の西にあり 太秦は里の名なり むかし應神天皇の御宇秦人日本に来り蚕をやしなひ機織をよくし絹を織て天皇
に帛綿をたてまつりその人々の膚をあたゝめけるゆゑに故に膚を秦と訓じて氏とす 秦氏則秦始皇の廟を建るより太秦の字
ふかく賞し給ひて此地をくだしたまひぬ 秦氏則秦始皇の廟を建るより太秦の
をくらへて太秦と 當寺のおこりは推古天皇十二年八月に大和國斑鳩宮にて
訓ずるなり
聖德太子近臣秦川勝を召て宣ひけるは我昨夜夢にこゝより遥北の方に
一村あり楓林繁茂し清香常に薫じ林中に大なる朽木あり無量の賢聖
諸經の要文を誦しあるは天童妙花を供し又木より光を放ち微妙の聲
ありて妙法を演ぶ今まで彼地に往ん川勝は則駕をめぐらして前驅せよ其日
葛野の大堰に臨んて夢にたがはざれば楓林の中に大園の桂樹あり
異香薫し其樹の空虚に奇瑞の寶閣あり光明赫々として蜂多く集り
聲を發し隨身の者は拂へども盡ず凡人は蜂とみれども太子は賢聖とみそ
なはし則假宮を蜂岡のほとりに造て川勝に勅し百濟より来る佛像
を安置し蜂岡寺と号す 後に廣隆寺と改む 廣隆は川勝の名なり 上宮傳記の大意
太秦の藥師如来は向日明神の本地なり 傳に曰 山州乙訓郡向日明神の
社前に橋本あり弘仁の年延暦のころに一日異人来りてこの木を伐て
佛像を造り南無醫王尊藥師佛と称し忽社頭に入る衆人見てこの像を
聽て集りしも霊験ありて耳目を驚かす 乙訓郡大原寺 日本後紀延暦十三年十二月乙訓社の佛像を大原寺に
移すに智威法師といふ人唐より来て居住し社司等かの像をわたしけれ
ば袖につゝみて群詣し感應ありて新なり智威没して後丹後國石作寺に
うつし其後清和天皇勅して當寺の本尊とし給ふ 侍賢小侍従の本書に見えたり
蒙求并源平盛衰記にあり
太子堂には聖德王御自作の世三歳の寿像を安置し代々の天子より黄櫨染の御袍
御下賜なり御自作の笏并御帯等を毎歳御增進あり 今に至りても年々御百年式に修行あり
不空羂索の宝配圖あり天陰の御時に毎年人
地藏堂 金堂の西にあり地藏尊は 鎮守社 三十八所の 閼伽井 伊佐羅井ともいふ 大酒明神
道昌大僧正の作なり
池の中にあり此池は紅蓮池といふ 石燈籠 太子堂の前にあり世に秦和と號す
寂照の作盤かうして 古風を慕ひて模形とするなり
土用塚 太子堂の西道の中央にあり 天照太神 八幡宮 天満宮 大酒明神
太子經王を收し所なり
もとは秦川勝の 桂宮院 太子堂の西一町ばかりにあり八角堂なり 推古
霊を祭りしもの 天皇十二年太子自ら土木の功を勅して造らせ給ふ 本尊は
所なり堂内に二体の本尊を安置す 一躰は如意輪観音則太子の御作 一つは阿弥陀佛は
隋煬帝より推古天皇へ送り奉る聖徳太子の縁に御自作して坐像なり

祖師堂　金堂の西南にあり中央弘法大師　北は理源大師　南は道昌大僧正の像を安ず　又北の間には如意輪観音を安ず　毎年九月十一日秋祭の
牛祭の神事あり　當寺の僧侶又は人々大尊の形に扮し異形の面をかけ風流の装束を
着し太刀を佩き人を幣を持て牛に乗り四人を前後に従へ松明をともし
行列して本堂の後より巡り又西の方より祖師堂の前に来り壇上にのぼり
祭文を読む　其文法古代の語をまじへ甚おかしき事なり　仍て後人取て聞書したりといふ

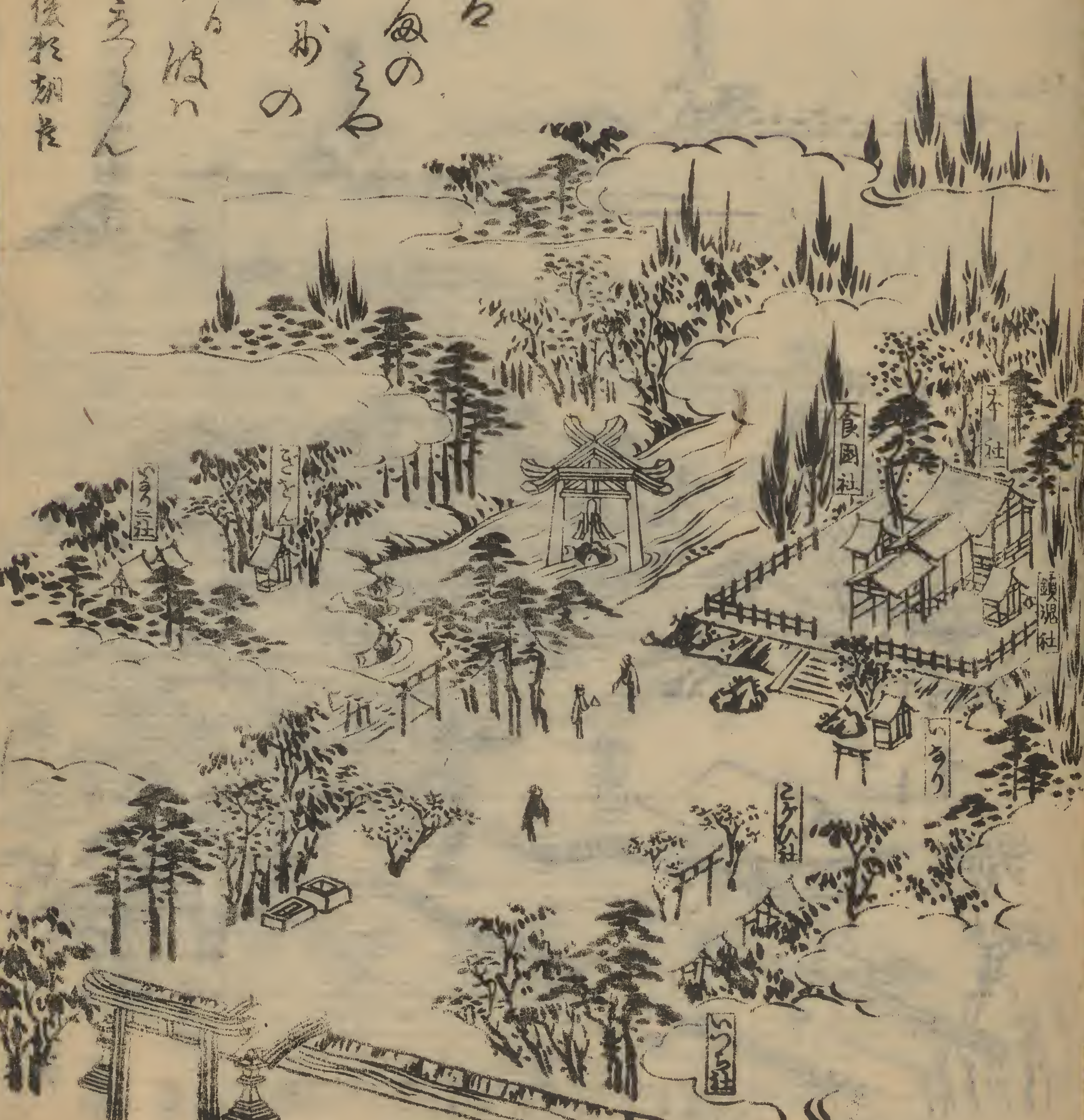
祭文

夫以　姓は乾坤の気をうけ徳を陰陽の間に保つ　信を尊みて佛法に入り　慎みて神祇を
天尊地卑の禮をまもる　是非得失の品は是偏に神明の廣恩　國恩草木の幣帛を
さゝげ　致して摩吒羅神に奉る　豈神の恩恵を蒙らざらんや　是によつて四番の大衆
等一心懇切を抽て十抄の儀式をまうくる　[illegible]　神明の法楽に
備へ諸衆の感歎にあづかる　暗に神の納受をまつらんと　然ば頭に大冠を戴き
くまんへ足に舊鼻高を穿き　牛に鞍を置き　面を [illegible]
馬に鞭をあけてかゝるもあり　偏に百鬼夜行に異ならず　如是等の振舞をもつて摩
吒羅神と祭る　[illegible]　天下安穏寺家安泰の [illegible]　因之永く遠く拂ひ
退くべきものは　先は三面の僧坊の中に忍び入て物を取る強盗人　奇怪といふはいや
小童どもを木々のうへのちらん　あり候ます　破り骨ある法師頭　おやうく
ゆがみは　あさ腹　瘧病　[illegible]　疔瘡　うるさき面風　さては尻瘡　虫くひ　膿瘡あつて痒き
に向へ　大いにかゝる [illegible]　鼻たれ　[illegible]　傳屍病　[illegible]
あれは鐘樓法華堂のあたり　讒言仲人　うとくしき合の中　言貪苦男
無縁女の隣　ありたるは堂塔の檜皮　喰ふ大鳥小鳥　[illegible]　大風小風
の時　[illegible]　永く [illegible] 根の國　そこの國へ [illegible]
そくへんをのきり　敬白謹上再拝

古法社　古秦の南にあり　向日明神　[illegible]
地蔵堂　[illegible]

木嶋社

新勅撰
ねすしみる
このしまの
もりの白ゆふ
白妙の
雪にまがへる
波のうらん
俊頼朝臣



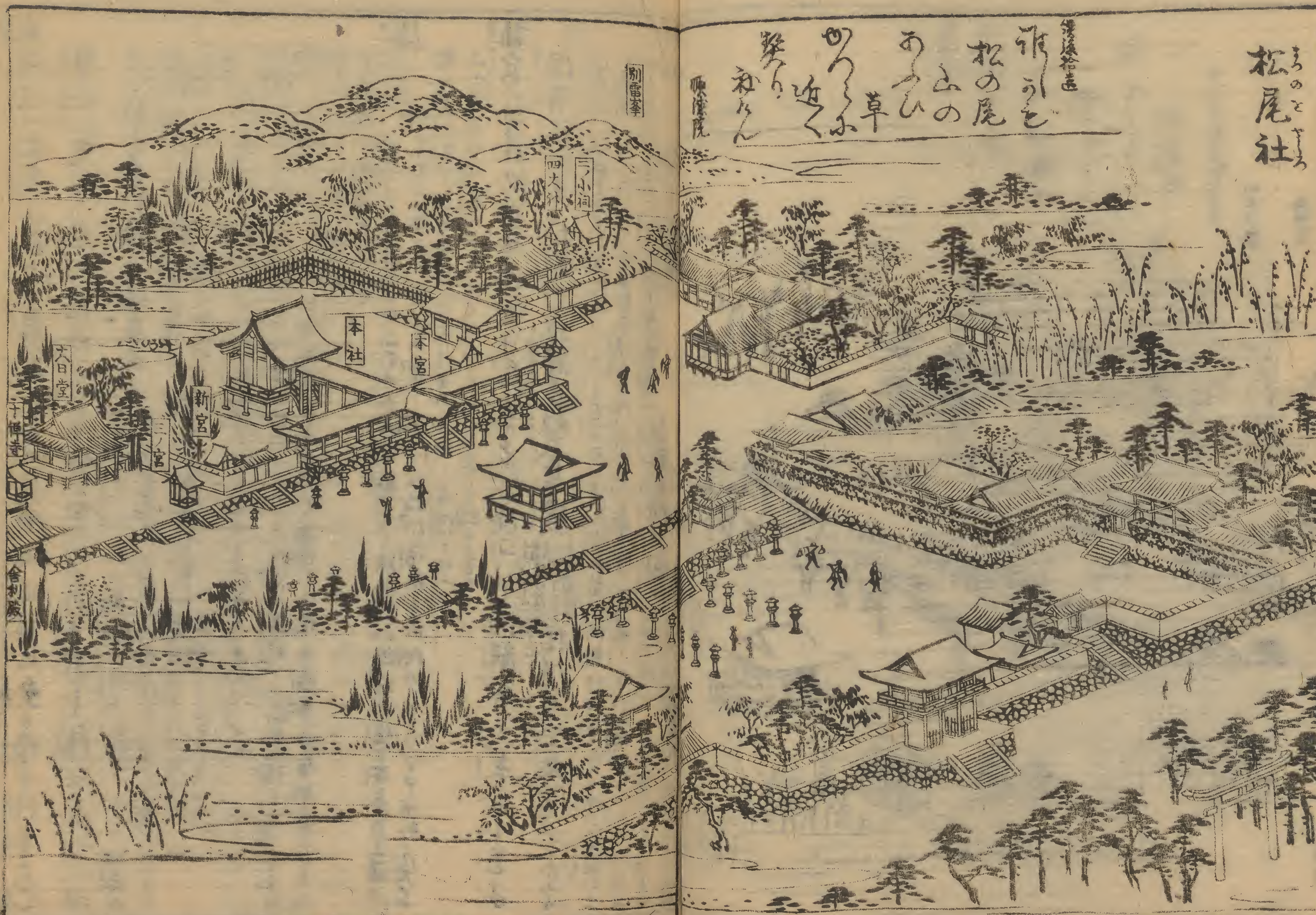
梅宮（むめのみや）

新後拾遺

あふく今
花咲梅の
宮はしら
たてしも
千代の
さかりをそ
見る

慶有




松尾社
まつのをやしろ
続後拾遺
松の尾山のあふひ草
近く
順徳院
別雷峯
四大神
二ノ小祠
本社
本宮
大日堂
神宮寺
新宮
三ノ宮
舎利殿

木嶋社は太秦の東の森の中にあり天照御魂神なり祭る所瓊々杵尊を合
貴命は左右に坐す蠶養社は本社の東の方にあり祭る所は保食神也
社の東と西の傍に清泉あり　世の人元糺といふ名義は詳ならず池中に三ッ柱の
當所社司　石鳥居　八角の柱なり　木椙の鳥井あり老人の安老をいのる
の號　森の入口にあり　例祭は九月廿一日　蠶養社祭は四月十二日　土用のうしの日六月晦日
拾遺　みとりあふ舟もかよはぬ木の嶋にいかであまの通ひそめけん　よみ人しらず
文保三年四月廣大士伊時遊仙窟を傳授せられける時源公の敎歎して此社に詣で枝中に手を
結し老翁あり常に来りて讀　伊時に傳へ奉りて相傳し一性の讀畢の後翻恩のために
寶をおくらんとするに忽然として去る
是當社の應現なりとぞ
海生寺　太秦の南竹林の中にあり今は草菴にして開山源山禅師の像を安置す本尊は
破れ車に乗して四衢を往来し世の人呼て車僧といふ此像何ともの姓のしらずおかし
又七百歳の年暦のうちに故ありて七百歳とも称すとぞ
梅宮は四条の西梅津里にあり祭る所四座にして酒解神大若子小若子
酒解子神なり相殿には橘贈太政大臣清友　諸兄公孫奈良麿子　檀林皇后嘉智子をまつる
此皇后は嵯峨天皇の后妃なりしかども子なかりしを常に愁て酒解神に祈りて夢に懐胎あり
て妊身の頃しきりに則當社の清砂を御坐の下に敷きて平安に仁明天皇生れ給ふ故に
世人産月に臨む當社の砂を取て帶とす　熊野三所紀州三熊野より三の鳥居をうつして祀る

梅津川　大井川の流なり此所に船渡しあり　四条通より下桜木の間は民家迄　長福寺　東梅津にあり禅宗にして開基は大燈
國師大寶輪といふ花園院の御帰依なり
咲匂ふ梅津の川の花さかりさこそ行瀬のかけもうつらん　為家
春日社住吉社　西院村にあり此所の氏神なり祭は八月廿八日神輿二基にして春日住吉二所也　野宮　西院の西道の南にあり嵯峨天皇とはちかし斎宮の皇女潔斎の地なり
松尾社は梅津の西にあり　別雷山は社のうしろの山なり當社の明神の降臨の地なり松尾山ともいふ
後拾　一条院の御ときはじめて松尾行幸侍りけるにうたふへき歌つかうまつりける
ちはやふる松の尾山のかけみれは今日そ千とせのはしめなりける　兼澄
本社に祭る所二座にして大山咋神市杵嶋姫なり神殿は大寶元年に秦都
理といふ人社を建て分土山より遷しまつる
鎮座記に云元明帝和銅三年四月十二日始て加茂より此所に遷し奉る
松尾七社　月讀社　櫟谷社　三の宮　宗像社　衣手社　四大神
茂の丹塗の矢化して松尾の神と現る則秦氏の女
同じ正光松尾の守護となる今の社司の遠祖なり
當本社の傍にあり例祭は四月上酉日仁明帝嘉祥四年に始る神輿七基西七條の御旅所を経て桂川を船渡し
渡しまたおくれあり八月朔日には鳥井の傍にて相撲あり
四月八日松尾祭
酒造家はこの神を崇めて味酒の祭りとす
舍利殿　本社の南にありいつの世に此所に大木の杉あり谷堂の延朗上人の日早くされを伐らし杉の木の中に奇特あらんと仰けるが本社の傍に埋めおき
うる銅塔を出して舍利を盛る上人奇異のことなりとて
延朗の言を信じ三層塔を建てられける
[illegible]

明智坊石像 松尾社の北一町ばかりにあり明智坊は山門の衆徒なり大乱と争乱によりて山門を退きて此所に隠居れ

月読社は松尾の南二町にあり松尾七社の内なり 当社鎮座のはじめは往昔よりして年暦遷座松尾より斉衡三年三月に紀伊国葛野郡月読社を松尾の南に遷れよし文徳実録に出たり又文徳帝仁寿三年に疱瘡大に流行して諸人これが為に死する者多し此時当社の神託ありてその害をすくひ民是よりして貴賤疱瘡の患を免かれんため此社に詣でゝ神のたすけを祈る也三代実録にあり

狐斎は松室の西往還の傍にあり 小社なり幸の神なり実は告地斎なり

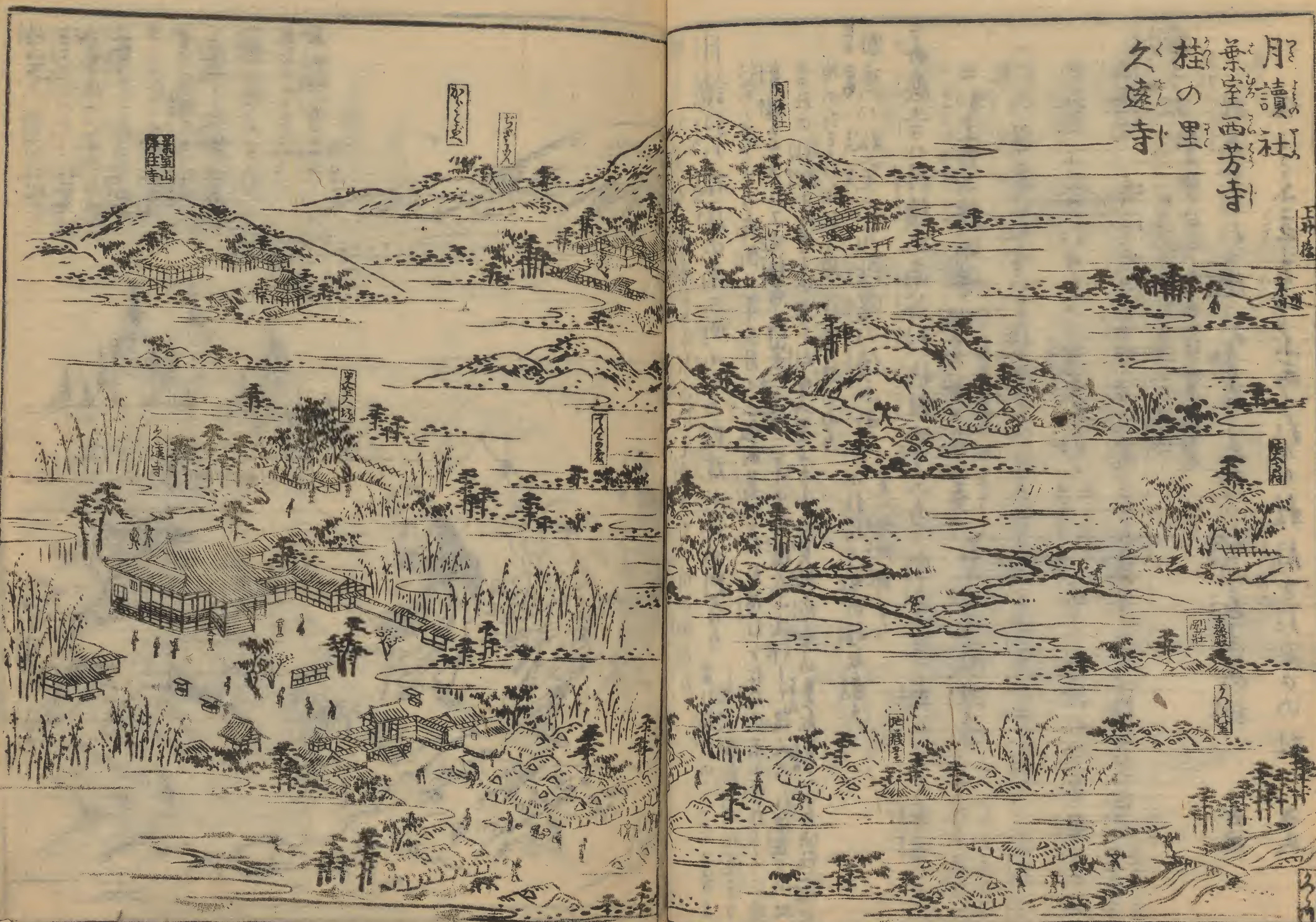
華厳寺は月読の南谷村竹林の中にあり宗旨は華厳にして本尊は丈六大日如来左に釈迦仏 頭に宝冠を戴く長一丈 右に開基鳳潭像 左の方は華厳経をもつ右の方は如意をもつ 計足華厳の相あり 山門の額華厳寺は英宗隠元の筆左右の聯も鳳潭の筆也此所は最福寺の延朗上人の住給ひし谷堂の旧跡也 寺を寺家の内といふ 近年鳳潭和尚華厳宗を起し再興ありしとて松尾安照寺を遷して華厳寺と改め此地にうつして寂した 元文三年青

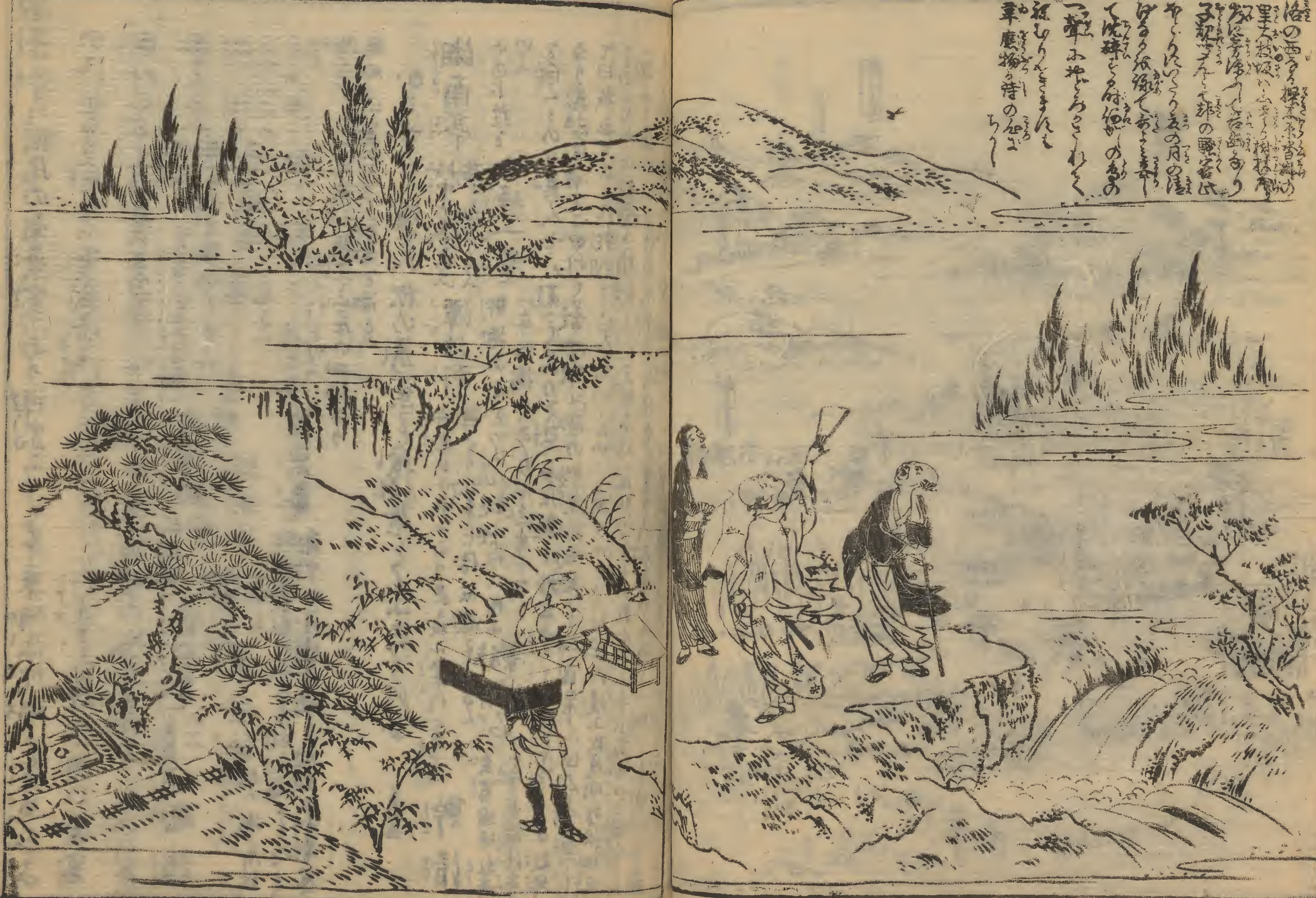
衣手杜 いにしへ松尾の社にあり洪水に漂流し樹木絶て今はたゞ松尾の社内なり

續拾 秋毎にたれか涼しとまちかねつ紅乃衣手の杜 信輔

續千 涼しさに立よる袖にかをりくる秋風わたる衣手の杜 為氏




月読社
葉室西芳寺
桂の里
久遠寺
月読社
久遠寺


洛の西なる探香寺の
里また松坂は山なる桜秋
冬に春深うして花あり
子規すみて秋の鶯宿に
やどりたいくつなる月の住
侍るなり霜ておもひきや
了洗碑よりの紅葉の為の
一聲ふ共よろこばれぬ
紅もりんきまんれも
華應輪寺の心ぼうし

西芳寺ハ松尾の南葉室にあり禪宗にして本尊阿弥陀佛ハ聖徳太子の作なり開基ハ聖武帝御宇天平年中に行基菩薩中興ハ夢窓国師之方丈の庭ハ夢窓の作にて庭中の造化四時の風光玄妙にして人此境を

西来堂 佛殿をいふ本尊ハ末迹の像也 額ハ西芳精舎と書る 瑠璃殿 閣下をいふ 無縫閣の 釣寂菴 書院也 いふ 砌猶

瀧口の傍の 貴風店 小店をいふ 山頂へ登る道の側の 縮遠亭 絶頂の小亭をいふ 黄金池 池をいふ 船の泊る所也

合同船とく 向上関 方丈と指東菴の小門をいふ 指東菴 庭ハ夢窓の塔あり向上関より入つて山中の佳境也 離厠の小菴也

指東といふハ是真如親王山居の旧地なり

国師此室に入つて秘奥を極む

かくせき道をバ松の落葉にうづもれて我住庵と人にしらるな 夢窓

湘南亭 池中の亭をいふ 橋を邀月といふ 潭北軒 佛殿の小西にあり其庭に業作七堂あり 貯清

小の小院を 権といふ 北斗七星を標とする

いふ 士峰一覧 此處山に向ふ所に 影向石 夢窓国師の命にて觀池亭

を開くの日異人七人来つて其力を持ちて石を動し池を穿つて自由に水を得らる 一字を構へて志れを…

[illegible]

け以件のけさとうけるすぐ(?)錫杖なり今その錫杖まで天龍寺にあり[illegible]

衣笠山地蔵院ハ西芳寺の南にあり禪宗にして天龍寺に屬す本尊ハ地蔵尊にして開山ハ宗鏡禪師之 夢窓国師の法嗣にて字を碧潭と号ス 舊此地ハ衣笠内大臣家良公の山荘あり 後山を衣笠山といふ 細川頼之當寺を建立して諸堂巌そう

應仁の兵火に罹て亡廢に及ぶ 今ハ延慶の遺りのみ 不動の井 衣笠山の麓にあり

葉室山淨住寺ハ禪宗にして黄檗派也本尊ハ如意輪觀音 坐像 丈六 佛

にまそて鉄牛和尚感得の尊像なりといへの開基ハ興聖菩薩とし此所ハ

葉室中納言定然寺を建て閑居して年うつて寺廢しを元禄二年鉄牛和尚

再興して禪刹とす

天鼓森 下山田の西にして 小社あり由来未考

文徳天皇陵 下山田の南 陵村にあり 御霊社 中桂村にあり橘逸勢を祀るとぞ

桂川 大井川の流れにして丹波より流れ大井川の西にあり神代の時月讀尊此所に

上野橋ハ十町ばかりにあり梅津の南なり 桂里 ここに桂樹あり故に號かくを粕の名あり

續古今 久かたの月の里のさとの衣おり人月のなにながれ 定家

廻地蔵 下桂にあり 華洛七道の一なり 毎歳七月廿四日群参ん

久遠寺ハ桂の西川嶋ニあり 此所ハ寺内 西六條本願寺の懸所ニて西山御坊と称ス

阿弥陀堂 本尊ハ安阿弥の作 開基ハ覺如上人なり 當宗の開山親鸞聖人より第三代ニして道徳兼備の上人なり 觀應二年正月十九日八十二歳ニして入寂を

覺如上人塔 堂後ニあり

ケチくの面 當寺ニあり 本化の面なり 旱の年里人此面を出して雨を祈れバ忽其驗あり 一年西六条本寺の宝蔵ニ収しニ寺内震動して止ず又此所ニ返し今ニあり 當村ニ災ある時ハ面よく しるそ其の山瑞ぞ ありし故ニ名とぞ

大枝坂ハ樫原の西一里ニあり 峠の西を町くりりニ山城丹波両國の境の立石あり 此所民家多し 峠の里といふ 丹波國の産物を商ひ

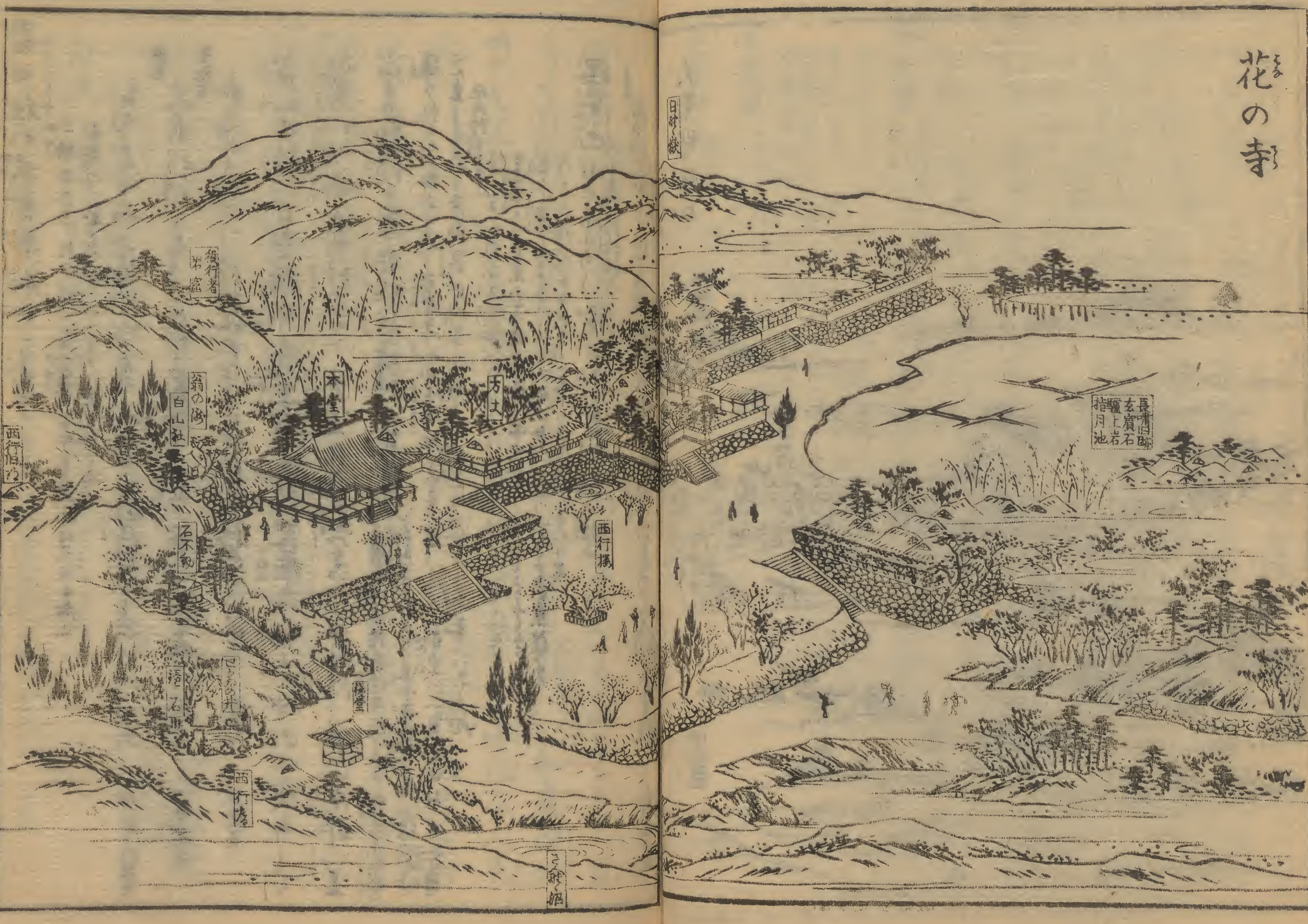
酒呑童子首塚 此所ニあり 大江山の鬼神を平げて 首を此所ニうけしと云 昔ハ此所ニ市場あり

峠地蔵 大福寺と號す 大枝坂峠ニあり むかし市盛長者といふ者の一人の娘あり 難産ニかゝりて空しくなる 恵心僧都此所ニ宿し持念観法の時 かの女形来りて苦悩を告 冥土のくるしミを救ひ給へと願ふ 僧都いろくの法門を説給へハ 女いつとなく地蔵菩薩の像となりて 誓ひ給ハく 産婦の難死を救ふべしと 地蔵菩薩の像を作りて安置し給ふ 今の本尊是なり

唐櫃越 樫原より峠ニ大木の松数株あり 山陰道の内より丹波の王子村ニ出る間道なり

大原野 樫原より坤二十町ばかりニあり 民村多し いにしへより山野里村をまとめて 大原野と云




花の寺
日野嶽
長嘯旧跡
玄賓石
驪上岩
指月池
方丈
本堂
翁の衛
白山社
石不動
西行桜
西行旧跡

春日社は大原野林中にあり

古今 二條のきさきの春宮のみやす所ときこえける時大原野にまうでたまひける日よめる

おほはらやをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいづらめ　なりひら朝臣

拾遺

大原の神もちかはんけふの為氏人の心ざしをば　一條摂政

續後拾

神代よりをしほの山のかげきよき神代のまつのかげかとぞみる　左大臣

當社の神は武甕槌命 齋主命 天津兒屋根命 姫大神の四座にして 往昔仁明帝嘉祥三年左大臣冬嗣公これを深く崇敬し南都三笠山より勧請し平安城守護神と定め給ふ 五條后順子姫て詣給ひしより藤氏の后宮行啓ありしとなり 遠ければ大原野にうつし后宮の参詣あらんとて御名をも遷し奉る 左大臣藤原の氏人は都より道のほど近くえ年より始る南都新の神事に准して祭あり 其祭は毎年二月上の卯日 仁壽

源氏物語の記事に その冬の頃に大原野の行幸ありて世にのこる人なく見さはぐ 朱雀院より大原の大臣の御車をはじめ 行幸の御車にて ものみ車 ありしていたく心なくて 西の川のほとりにまうけ いづれも御車をたてて車とどめて侍りけり 六条院より侍りつかうまつりきこえて供奉さたいたすべき由のふれありつる

鯉澤池 社の南にあり 中將の御神社也 瀬和井清水 池の傍にあり

まま

我なのみすまでせでの井のかはづはしきりに人の心のかはるとぞなく　大江匡房

小塩山勝持寺 春日社西にあり 花の寺と称す 宗旨は天台にして本尊は薬師如来 傳教大師の作 本堂の額は小野道風の筆 當寺はじめの開基は役行者にして自作の不動明王を本尊とし大原寺と號す 不動尊今堂に安置す 伽藍僧坊 四十九院巍々として嚴重たり 年経て破壊に及びしを佛陀上人再建す 文徳天皇佛陀上人を御帰依ありて伽藍をたてさせたまひし 岩窟并石不動は弘法大師の作なり 西行法師像 西行櫻 堂前の左右にあり 西行庵室 寺より三町ばかりにあり 當山の境内に桜花多し 盛の頃は都下の貴賤ここに来って終日花の陰にあそぶ よりて西行の

霊松 我のもとに石壇の下 辨財天社にあり 役行者窟 西の山上にあり

鏡野沼にあり

まま

いろふけさけえ沼やみちをんか小塩の山は雪ふりはて　光俊

毘沙門天 傳教大師の作 本堂に安置す 地蔵菩薩は作なり 方丈にあり 役行者像 堂内に安置す 白山社 當山の鎮守也

二王門 金剛力士を安置す 阿の像は運慶の作 吽の像は湛慶の作 玄賓石 林の中にあり むかし玄賓僧都此地に住せしといふ

慈鎮和尚も此地に隠れの地の景を歌にして詠る

續後撰

草深き宿は我すむところとや世にうとき人の世を作るもおもしろし　慈鎮

元和年中若狭守勝俊世を遁れて此所に幽居せらる又号を長

嘯子と自称して東山にも居られしなり 此人和歌に名高く挙白集あり

長嘯塚 孫生塚 驢上岩 細川玄旨幽齋も長岡に閑居せられし時連歌の宗

指月池 等此地にあり

匠紹巴等あつまり此寺において元亀二年二月五日より連歌を興行せられ

しるされけるを大原千句とて世に名高し 連歌の懐紙を当寺の什物とす

長岡の都は桓武天皇延暦三年に奈良の京よりうつされし皇都の地 上羽村

の辺にあり字を御所屋鋪といへり 堅木原の南より山崎の北まで南北長岡

なれば長岡と號す 然るに此地は都のあと八十三年の間にして今の平安城

にうつされし 今は上鳥羽 西の岡といふ

古今 なりひら朝臣の母のみこながをかにすみ侍りける時になりひら宮づかへすとて時々もえまかりとぶらはず侍りければしはすばかりにとみの事とて文をもてまうできたりあけて見ればことばはなくてありける歌

老ぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほしき君哉

返し

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため なりひらの朝臣

稲荷社 又坤方の南林の中にあり 其東の所は大歳神にして向日社地主

神なり 御母なり 例祭は九月廿一日 拝殿において祭あり 此所の産沙とす

西岩倉金蔵寺 又坤方の南長峯坂本の西山上にあり 桓武帝の勅願

平安城造都の時王城の四方へ経王を収めらる 此所も其一所 天台宗にし

て岩倉と号す石蔵はしかる所にあり

て本尊は十一面観世音なり 御作 向日明神の 不動堂には五大尊を

安置し念仏堂には阿弥陀仏を安置す 滝あり二段に流れて

一の滝二の滝三の滝といふ 向日明神化現し給ふ所なりとぞ

開基は隆豊禅師 此人は薩州の人 父は薩摩大守重命なり 十三歳にし

て出家し元興寺の道昭に随ひて禅法を聞 龍門寺にて

義淵に就て唯識を暁し又呉国の智蔵に随ひて三論の微旨を究め

ありしかれ霊感によりて当山に来り 老翁忽然として

来り隆豊に向ひていはく我はこれ此山の主なり 公を待つこと久し

ようやく此所に住して法を弘め給へとて 錫を持て金光の麻とびきたり

を指してその木をきりて ある樹にかかりけるを

ありしを公翁にあたへて霊木なり 千手の像を彫み給へといひて失ぬ

言に感じて尊像を彫刻せり 今の本尊これなり 翁又日此地を師に

授くべしとて 仏閣を建て此像を安置し給へといひて かの翁は

ここに止まりて 終つらくまもるべしとて 其の神勅に従ひてかの伽藍といふ

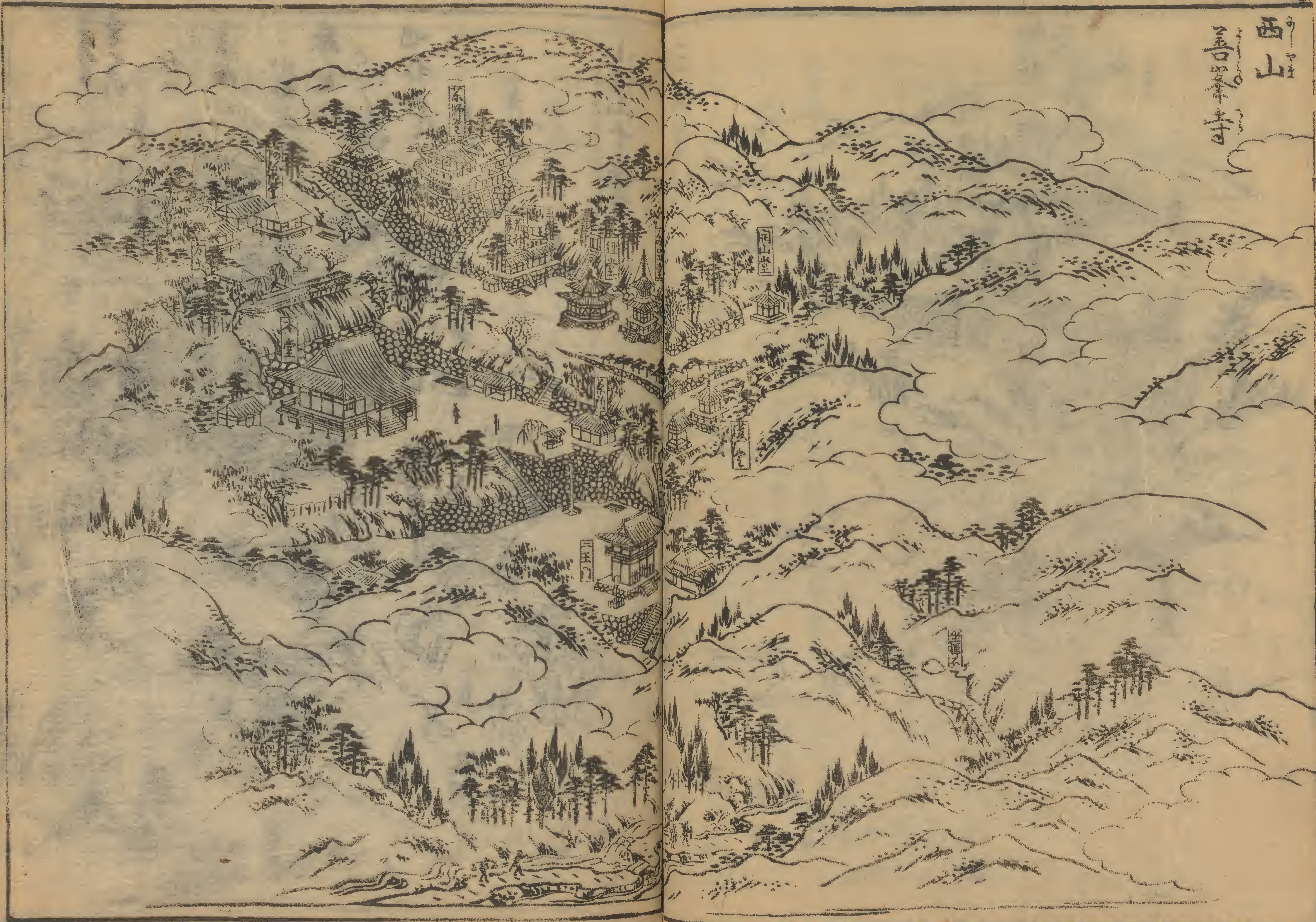
あらはしけり

西岩倉金藏寺





西山三鈷寺ハ岩倉の南灰谷の上にあり宗旨ハ天台真言律浄土四宗兼学にして
本尊佛眼曼陀羅ハ観性法橋の筆也日本無二の曼陀羅にして信ずる人ハ霊應殊験あり左右の
壇上にハ釈迦弥陀の二佛ハ安阿弥が作恵心僧都の作也堂内にハ智者
大師像善導大師像善恵上人像宇津宮蓮生法師像等を安置せり
金色不動ハ智證大師の作也方丈に本尊あるにハ窮人の阿弥陀仏を安置せり
抱止阿弥陀如来ハ慈覚大師の作也むかし宇津宮頼綱入道蓮生法師生前に阿弥陀佛を拝せんとて
こゝに本尊に向ひて念佛をとなへ余念なくしけるに
菩薩の来迎を拝し感信ふかくして
に往生をとげんとしける時しばしその鐘をかならずして本師を抱き止め奉りしと
押とゞめて則ち往生を遂る故に世の人抱止の如来と
称すと貞永元年八月十五夜の縁起
一巻ハ西三條逍遥院の御筆也
當寺の開基ハ源算上人也観性法橋慈鎮和尚も此山に住給ひし
中興ハ善恵上人也 善恵廟塔の前にあり碑の銘あり 世に西山上人といふ浄土宗一派の開祖也
當山ハ絶頂を髻嶽とよぶ是峰ありて真に三鈷に似たればいふ
三鈷寺にして山人曰此山頂より二大佛七城見ゆるといふ所謂二大佛ハ京奈良なり


西山善峯寺
開山堂
本堂
二王門

雲葉拾遺

書てけり秋の名勝と小塩山麻をこそひやゆあらんらん

中臣師宗

小塩山十輪寺



西山善峯寺ハ小塩の山上ふあり天台宗ふして本尊ハ千手観音なり
此本尊ハ加茂の神木槻木なり行円法師異瑞を得あし弘仁法師を招て千手の像を
作らしむ又洛陽革堂の本尊ハその餘材をもて云人の像を作る当寺本尊是なり
阿弥陀堂の本尊ハ慈覚大師の作二重塔ハ大日如来安置
開基ハ源算上人 旧因州の人なりして狐とうり道のほとりに捨られし所の人
拾ひて養育し比叡ふまかせて剃髪受戒し四十余年登
壇灌頂又功を積恵心僧都の弟子となり異夢を蒙り当山にきたり石上に坐して
七昼夜坐禅を勤修して老翁来ていふ此山の往古知法跡といふ上人早く
仏場を建立し給ふ可なりいはふ教を踏まへて荊棘を平ふし化して去る
天聴に達し後一条院御宇長久二年の秋伽藍成就しかんなり
白山水 当山宝光坊ふあり源算上人如法経書写されし白山権現出現し五穀の種を乞れ立ちしたまへり 仙翁石 源算上人の僧
読念しぬる所ふて 阿智坂社 当山へかゝる七面の中ふあり 此寺の守護神なり 観性法橋墓鎮和尚
坐禅石とかく
尊圓法親王等の墳ハ当山の北ふあり

小塩山十輪寺ハ若峰ふ隷て小塩里ふあり天台宗ふして若峰ふ属す
本尊ハ観世音之 花山法皇西国巡礼のとき皆 腹帯地蔵 深殿皇后安産の
在原業平塔 当山西の故小禅寺観音とらへ
塩竈古跡 本堂のうしろ山上ふあり業平塩屋の旧跡
潮溜池 当寺より一町本ふあり潮を汲せ此所ふ焼しと此池ふ汲溜しとそ

業平の母の住
ゐし墓所ハ長
岡といふ所に侍
りし御俤ふかん
繞りたる其所ハ
小堤のかたハらに上稀と
いへ里ありける
ゆゑにすゝめへハ
尾花が袖萩の
花妻をかけて
し所に立寄り
むかしを感し
懐旧の和哥を
よみてくるもの
多侍りけれ




朱雀権現堂
爲義塚
水薬師
本堂
権現寺
爲義塚

権現堂は七条千本通にあり本尊は勝軍地蔵にして聖徳太子の御作
愛宕権現の本地仏なり 脇壇には聖徳太子の像あり 弘法大師自作 又對王丸の守本尊地蔵を安置す
むかし對王丸人商人に勾引て行道より逃帰て此寺に頼けれど住僧人商人に追ひ
來るをおそれて首鎗を懸して天井にはりて守りて首鎗をおやしみ
開たりけれど此本尊身代となりて當寺は権現寺と号し浄土宗なり本尊
は難をまぬかれ救ひ給ふとなり
阿弥陀仏は恵心の作なり むかしは歓喜寿院とて洛中封疆数の中七条通の南に歓喜寺の森とて旧跡あり又洛京西口の守堂の口と
いふ往古は此辺境内にして真言宗なり
旧寺の図 當寺にあり
源為義の塚は権現堂の前にあり 朱雀の大路 民家の間にあり 保元二年後白河院の勅をうけて源義朝
鎌田兵衛正清に申付けて父為義を誅せし所也則権現寺の持地なり
為義坂 畑の下にあり 嘉屋御所 朱雀の西道の北にあり田原藤太秀郷の宅地なるとぞ
藪の中に松尾明神御旅所 西七条にあり 七社の御旅所あり 西七条より勝寺村にあり
小社あり
綱敷天神 西七条北側にあり 靫負天神 綱敷の西にあり此宮の東南北の道あり 大内裏の右京にして靫負通之故にや
水薬師寺は西七条の南にあり本尊薬師如来 延喜二年池中より出現す 殿天社 本堂の乾にあり
社の下に清泉湧出て平滑盤銀鏡の 辨慶石 後堂の前にあり古は三条
これ此水を汲んで盗せしとぞ 辨慶石町にありしとなり
門の額は[illegible]水薬師寺と書す當寺近来の住職泉南の峯なり



川勝寺は西七條の西七町にあり むかし秦川勝が建立の所なり 則川勝寺村の中所々にあり 今松尾の祭礼の時神輿の神供所とす

西寺は旧跡を梅小路の南になり 守敏の旧跡梅小路西方寺にあり

唐橋は四ッ塚の西六町にあり 秀吉公朝鮮出陣の時此御道を通られしとて唐橋と号す又捨分橋といへり むかしより唐橋通ありそこは東寺の西にて此橋に川ありて其の下流にかゝる橋なれバ唐橋といふ 是は後人の考へなるべし

吉祥院天満宮は唐橋の南にあり本社は菅神なり 吉祥院にて吉祥天女を安置す 傳教大師の作なり 此所は菅家の御領地にして別荘あり 菅家の祖清公卿延暦二十二年遣唐使として異朝に赴く 海の船中にして風波の難に遭へり 此所に祈しも傳教大師求法の為に入唐し則同船して吉祥天女の法を修して忽然風波和て帰朝せり 故に傳教大師吉祥天女の像を造る 清公卿は此地に堂舎を建て此像を安置し吉祥院と号す

石原井 菅原の傍にあり 菅家の像にあり 菅神此水に祈りし所といふ 近年書家鳥石菅原碑の銘をきざむ

鳥羽里は四ッ塚の南なり 上鳥羽下鳥羽とて南に壱里 それより民家多し

秋ふけぬる鳥羽田の面の秋風に玉ゆらゆら中ら宿れ稲妻　後鳥羽院

同

あやなくも刈人もなし山城の鳥羽の波に月ぞ宿れる　前中納言経継

同

露ふかくとりくる月ぞ置そ鳥羽田の傍につきよき　安嘉門院四条

松尾祭礼




吉祥院
天満宮
上鳥羽
實相寺
貞徳翁塚
地藏堂
さいつり

下鳥羽
戀塚寺



實相寺は上鳥羽西側にあり浄土宗にして開基は文覚上人なり本堂乃
脇壇に松永貞徳翁の像あり　父は永種と号す長頭丸又延陀麿とも号す松永弾正久秀の孫なり天正五年大和国に生る
貴城頭七のよりて九才なりしが母方の親族に養れ織田長の法式道を好みて
歌を師として長嘯翁を友として和歌をおほよくし誹諧を以て世に鳴る
蘆丸屋　本堂の巽にあり貞徳翁閑居しありし所なり
貞徳翁墓　芦丸屋のうしろにあり上も逍遊軒明心居士とあり
應二年十一月十二日
卒八十三歳

家集
これ死るは樒に花をたてまつりし佛のちかくやゆかん　貞徳

同
あはれしるときの舞ひきゝし舞へくかゝ盛りなりけりしな
長嘯翁西山へ赴りけるときつかはしける

同
とふくに月をもはなれ世にすむ身とや宿もとめて山に入らん　仝

廻地蔵　實相寺の南東側にあり六地蔵巡の一所なり　觀音堂　地蔵堂の南に隣る
聖観音を安置す

戀塚　観音堂の南浄禅寺の門前にあり羅山子の碑の銘に遠き積夫に永井日向守
直清恋塚二ヶ所ありいづれも決しがたしある人の曰
年譜し経をよむ法師なりしが
にこれ埋むしてそん故に経塚ともいふ

小枝橋　鴨川のながれにかゝる橋なり上鳥羽の南なり　久我畷　上鳥羽の南れ端より久我の里をへて
民家を小枝町といふ

秋山　小枝橋より南にして茶店の向ふなり鳥羽法皇...
民家依くり紅葉の多く植させ給ふ所と...

続後拾遺　衣手に鳥羽田の里の稲筵いくよになりぬ秋の山かぜ　俊光

新後拾遺　夕日さす秋の山本霧はれて鳥羽田の稲葉露ぞみだるゝ　等持院

恋塚寺は小枝の南八町ばかりにあり　堂の南に塚あり　銘に曰　渡辺左衛門尉源渡妻
袈裟御前秀玉善尼墓　天喜元甲子年六月廿四日　文覚上人開基恋塚振元の地嘉応二庚寅年建立なり
遠藤武者盛遠　出家して文覚上人　渡が妻に恋慕して千束の恋を書す事に
随ひ渡が姿と欺き盛遠に斬らる　貞女の操を後世の鏡とする所なり

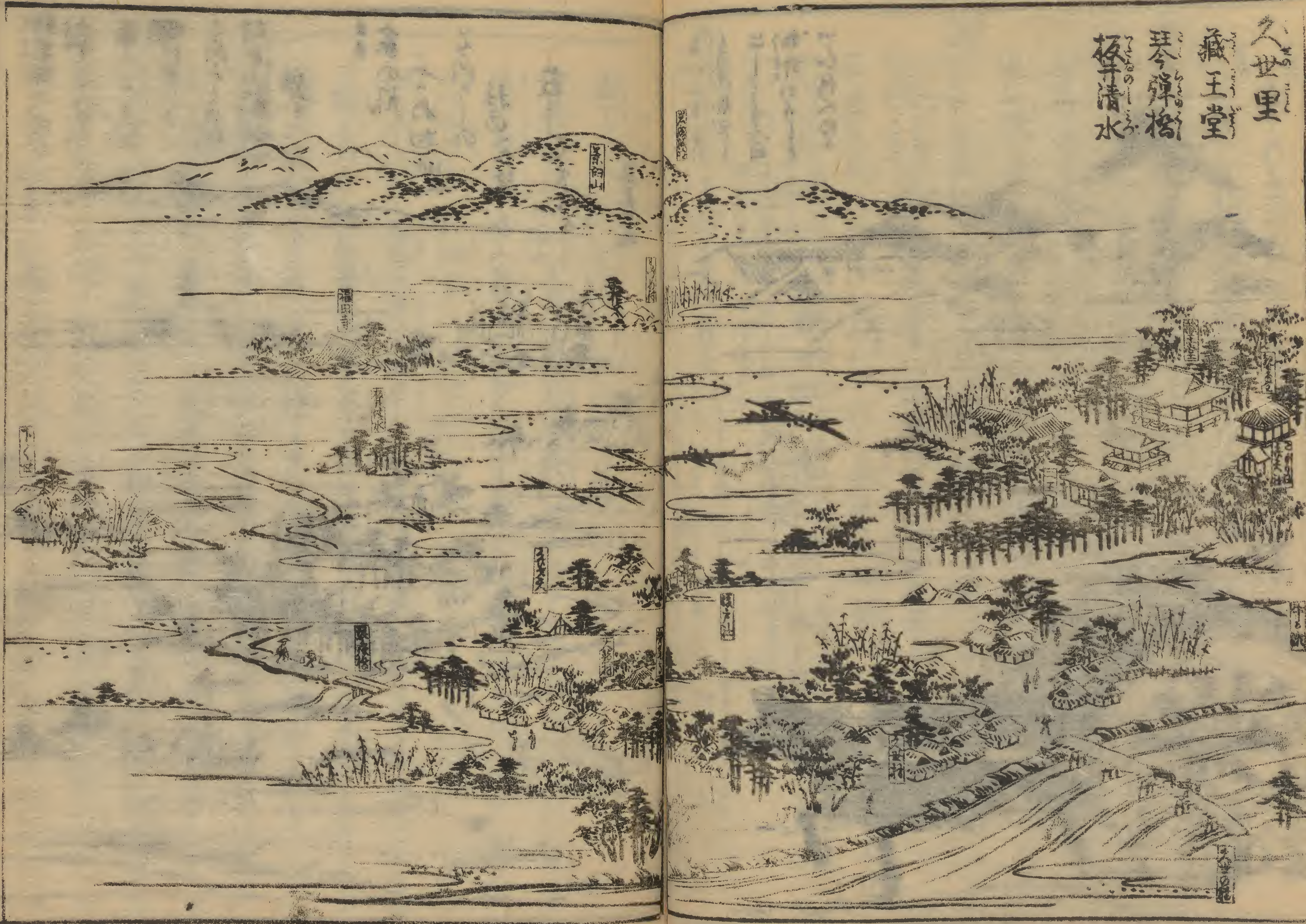
法伝寺は恋塚の南にあり　始は真言宗にして本尊は薬師仏なり　安楽院
行基の作也　門内にあり　洛東智恩院住職円智上人此寺に閑居して浄土宗に改む
本尊の阿弥陀仏は恵心の作　善導大師像　の作　法然上人　法然上人像
西山上人の作なりといふ　二祖対面の像といふ
方便水　門内の小にありそのかみ聖人を多くあつめ念仏を唱へさせて井を堀しむるゆへ此名あり

一念寺　法伝寺の南にあり　本尊阿弥陀仏は春日の作なり　開基は真阿弥陀仏といふ

横大路は下鳥羽の南に続く　此所の道はこれよりありしなり　秀吉公の代に此所を
むかしより民家多し　兵庫尼ヶ崎より淀に至る
運送する舟着なりしより毎朝未まで数ひあるゝ　淀の米大坂より此所



久世里（くせのさと） 藏王堂（ざわうだう） 琴弾橋（ことひきばし） 椋井清水（むくのゐのしみづ）



羽束師の森ハ
久世より一里斗
南にして久我
畷の東にあり
はつかしの社ハ
天津児屋命を
祭る

夫木集
家の風
ふかぬ世もなし
はつかしの
杜の言葉
茂りそへける
藤原良輔



上久世蔵王堂ハ医王山光福寺と號し宗旨ハ四宗兼学にして本尊ハ
蔵王権現 役行者の作又二王門の金剛力士ハ聖徳太子の作也 此寺の初ハ村上帝の御宇天暦年中にあらく
浄蔵貴所 当寺の開基也 吉野の奥金御嶽に峰に籠りて一心に密法を行ひ玉ふより
洛に帰らんとし給ふ夜夢にまのあたり現じてあらぞ蔵王権現忽然としてあらはれ
のたまひけるハ汝常に法施怠らずして我が為の力を今都に帰らハ我をも
供せしめよ 有縁の地あらん其所に安置せよと貴所奇異の思ひをなし 吉野の苔を
解て肩に結び背に則頂奉り法を念じ忽化して木像となりたまふ
桂川の西に至りし時持しける鉢の中の水を落て水を結びて此の
所に至る又一ツの森の中に光明ありて是ハ弁財天の霊場なれば
蔵王の神像大石の上におゐて暫く止まる有縁の地と悟り則此所に安置し奉り
持念をはじめ夜西の方に大きなる柳生じ又明星天光明あらはれ柳の下に
弁財天医王善逝と唱へて拜を貴所ハ弁財天の来臨の
地なり今此所に蔵王権現此地に來り早く仏閣を建て安住せバ利益広大

なりしと云終て失ぬ貴所これの影告を崇ミて一堂を営ミ像を安置す 當る縁起の遺とゝろ

綾戸社ハ蔵王堂の南にあり牛頭天王を祭れる也 例祭ハ四月十九日之六月祇園會祭礼馬の頭を首にかけて町内を踊ることも當社ぐらゐ稀なる事なり

鷲尾寺ハ中久世の西大藪にあり本尊ハ薬師如来にして龍の背に乗し尊像なり

いにしへハ殿堂ある伽藍あり中比回禄に及んで
小堂となり今曹洞宗の僧住持す

森下明神ハ此寺の西にあり兵賊天を祭る也此里の氏神とし祭ハ四月巳ノ日之

福田寺ハ下久世にあり本尊ハ地蔵尊にして行基の作なり摩耶夫人の像ハ

をかつしりて世の人安産の為に梁武帝から作りし赤栴檀なる像

なり 弘法大師入唐の時に帰朝し摂州 龍神像ハ後恵法師雨乞の法を

摩耶山天上寺に安置し後に此寺にうつりしを

修して 旱の年雨を祈られ 板井清水 此寺の良にあり むかしハ福田寺の封境なり

霊験あり

宇多天皇六代の苗裔後頼の子にて智世に鬱ありてかざいろこのれ為の
道をまもらせられし世の栄ハ宿因にて脱塵のこころ起りて此るに住しゝとば
樹の陰どんもたてしハ庵らうぬとりんハ錐をさしける地ともものぞすまじ閑しすれ
をとつりきりそりしもをちどすりぬ年経てみさらん来てあはるる翁をとすぶ
細れバかやが檐端の虫のさゑさゝの小篠の露ふりしを室さへそらうをとられそ
清かりま月もさんぞおりれさいらくましクれそ
古今の板井の清水みくさみて閑さんをあそうれたりれ

後恵法師

向日明神ハ久世の坤のかくにある所一坐にして鸕鷀羽葺不合尊なり
延喜式神名帳に此所の氏神とし例祭ハ四月中辰の日之地主神ハ本殿の南に
ありて向日明神と號を素盞烏の孫大歳の神の御子之 白山権現と白保の
延喜式神名帳

三代實録等に記ハ石座神ハ旧路の地ハ鳥井の内道ハ米にあり 世に成合塚と
此地主の神なり
向日山 當社の山とゝろ鳥見山とも云 勝山と号をられ豊臣秀吉公羽柴と
征伐として出陣の時ハ気詰ましく此山の名を社人に尋す
勝山と答ハ吉例語悦ありて
称をらハ叡之
ちいれらりなつけ初しとぞ

土佐日記ゟ
新しのゝたのむらひありて家わいもるうをせぬらへいみやしぬ　貫之

夫木
秋風にきそられつ"ける月くけ紙むらひのよれ男庶もなり　隆祐

夫木
すきしにむらへの里わりつるまのぞそうちまとまはさて見ゆ　後実

真経寺ハ向日町の東の端にあり法華宗にして日像上人住ゐし所之

寺戸の願徳寺ハ法菩提院と号く宗旨ハ天台にして本尊ハ正記ちる事なり

開基ハ慈覚大師山門の別院とぞ

乙訓社ハ井内にある春日四所の明神を祭れる之 此里の氏神とし祭ハ
四月辰の日なり

向明神

むかふのみやうじん



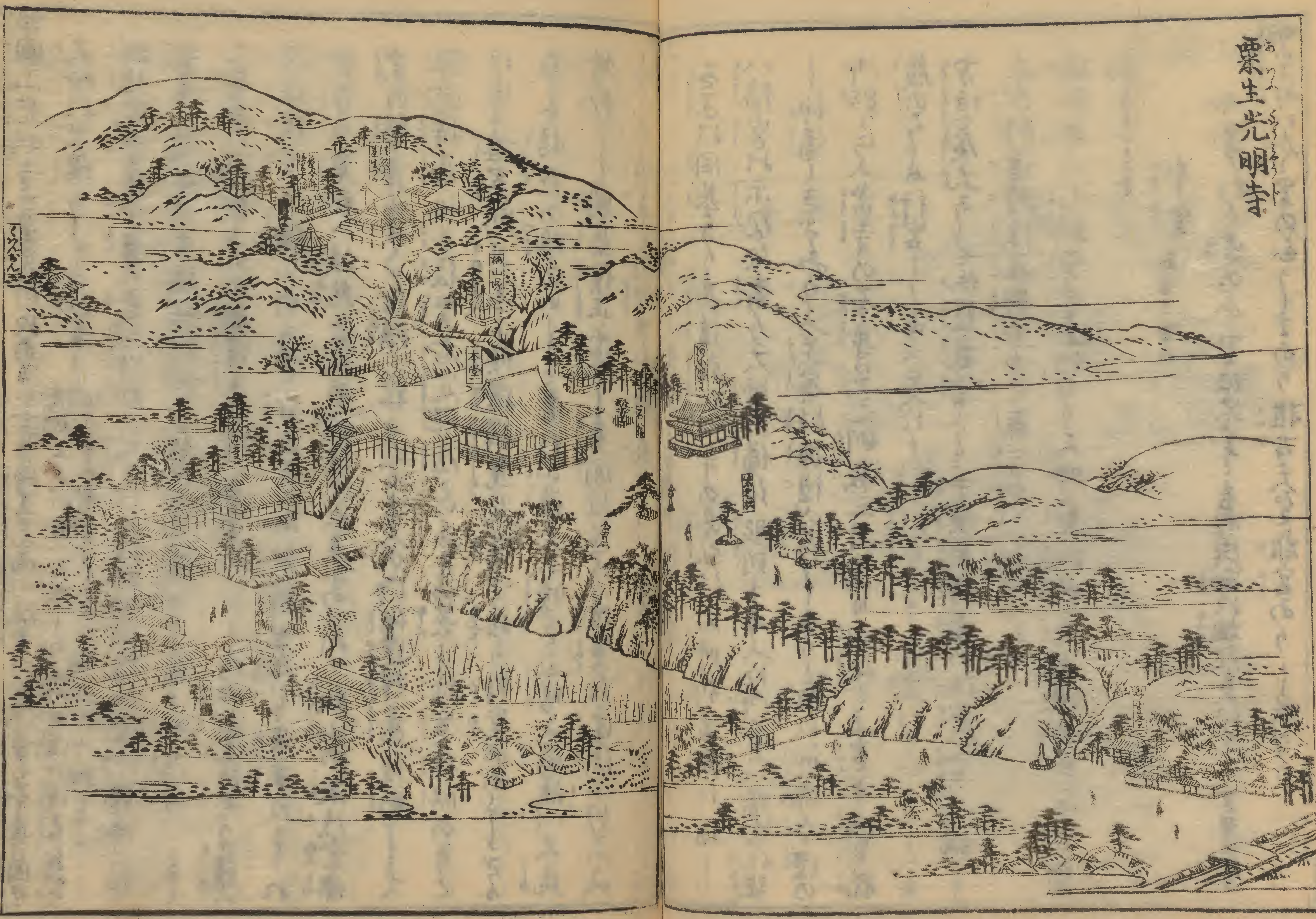
大慈山乙訓寺ハ西岡今里にあり當寺ハ推古天皇の御願にして聖徳太子の開基なり其後弘仁二年の冬弘法大師別当職に補し八幡宮の示現に依て影向あり大師の像を彫刻し給ふに御首ハ八幡宮化現し神像をきざみ給ふハ是蜜法擁護の為なりとぞ故に神佛合體の御影とて當寺の本尊是也例載三月廿一日開帳あり又寛平法皇脱履のゝちに行宮としたまへ是によりて法皇寺とも名づけ給ひしとぞ方境廣大にして伽藍嚴重たり中頃南禅寺の伯英和尚住職し又武州護持院再興ありて真言宗となりしとぞ閼伽井ハ乙訓寺の東にあり大師蜜法修行の時汲ませ給ひし霊水なりとぞ

今里 和歌名所

日暮れば遠の今里暮そめて羽田の面に烟たなびく　光明法親王

明星井ハ今里の辺りにあり推古天皇離宮ありし所なり




粟生光明寺
本堂

報国山光明寺は粟生野にあり宗旨は浄土宗西山流義の一本寺なり本尊は円光大師の坐像にして自作なり法然上人四国へ左遷しの時母儀の消息紙にて作りあたへ給ふなり世に張籠の御影といふ阿弥陀堂の本尊は恵心僧都の作にして江州堅田浮御堂千体仏の中尊なり熊谷蓮生法師法国を負ひ出りて此所にとゞまり艸庵をいとなみて安置す法然上人の廟蓮生の塔は本堂のうしろの山上にあり石棺は阿弥陀堂の傍にありて方丈には御鉢釈迦仏を安置し給ふそれ当寺の草創は法然上人の滅後十六年にあたりて叡山の衆徒念仏宗の繁栄をそねむの衆徒深く猜んで上人の所作選択集を破して弾選択集并に複堅者定照房といふもの著し隆寛律師のもとに送る隆寛則其答に顕選択集を述て彼の僻案のあやまりをさとるなり其暁夜の礫のごとし書は山徒大に憤りて三塔に触流し大衆蜂起して円基僧正に愁へ奏聞を経て隆寛を遠流に処し又上人の墳墓を破却せんと評義まちまちなりし故徒弟ら聞て大に歎き御墳所をうつさんと夜に入て人にしられず石櫃を堀出し其外上人所持の尊像をいだいて太秦来迎坊のもとに送る其翌年安貞二年正月になりて上人の石櫃より光明かゞやきしかば来迎坊あやしみ光のさす所を尋ねて太秦より西の南のかた粟生野にいたりて則此所に住せる幸阿弥陀仏のもとに来りて其趣を語るに幸阿弥も不思議の霊告ありて共に符合しければ上人の徒弟太秦より石櫃を粟生野にうつして是を開きければ上人の面貌存日のごとし則当寺の山腹において荼毘を行ふ時に忽然として紫雲空にたなびき異香四方に薫ず則舎利を拾ひて廟堂を造立し浄土一宗の宗廟とす紫雲を覆ひし所に松ありてこれを紫雲松といふ今当寺にあり已上当寺縁起の意をとる惣じて当山は殊勝の地にして山林の陰には宝閣そびへ常行念仏の声きこえ講堂には一万巻をひらいて真如の月を探り秋は紅葉聞風になびき黄金を布の祇陀園ともいひつべし当寺の本堂は近代の建立にて恰好比類なし後代造立の規矩とせり


奥海印寺寂照院
楊谷観音堂


長岡天満宮
長岡や
西園寺
薬師
開田村

本上山奥海印寺寂照院は粟生の南十町余にあり宗旨は真言にして
佛殿の本尊は千手観音安置し弘法大師の作なり二王門の金剛力士は
運慶の作なりとぞ開基は道雄僧都又當寺の山上に人破岩と号する
所あり妙見菩薩善財童子とあらはれ法華経を僧都にさづけし霊
崛なり又本尊観世音は椎の木のうへに出現しあまり此山を本上山と
いふ道雄僧都の俗姓は佐伯氏にして華厳を学び後に空海に従ひて
真言の密教を授る嘉祥三年に権少僧都となる（當寺傳記の意をとる）
妙見のやしろは西の山林にあり此里の氏神なり祭は九月廿一日なり
柳谷観音堂は奥海印寺村の西半里ばかりにあり立願山楊谷寺と號す
本尊は千手観音にして將軍地蔵毘沙門天の脇士あり當寺は白川院
・御宇に水観上人閑居の地にして此本尊感得し給ふ
楊柳の瀧は本堂の下壇左にあり（俗人此所に籠りそゝぎ誓約をなすとぞ）むかし一流の渓川瀑々として右
に鳴て流れ小倉の鳥井の前を経て山際の少し淀川に入らる故又位川とも

長岡天満宮は開田村の西にあり當社は天満天神宮の鎮座にしてく
神殿の額は霊元帝の宸翰也社記に曰菅丞相太宰府に左遷され
給ふ時暫く此所に駕をとゞめ給ひ菅氏東小路祐房と云ふ
もの此地を慕ひ奉りて御餘波を惜しみ給ひて菅丞相みづから
尊容を刻し祐房にさづけ給ふ後に小社を営て長岡天満宮
と崇奉る
社頭の道の左右は池塘広くして風生じては細浪漲り萍藻浮びては
魚鱗かくれ汀には紅葉多くして水の面に夕陽紅を映し秋の景色
踟躕を風景にうちまずへし
鞆岡は開田の南にあり
神道百首
いくらぞ[illegible]のとものゝ森の紫の葉に手向て手向ません　兼邦
清少納言枕草子に
とものもりはさゝれとひくるか、のしきなりと書しは此所なり

小倉のやしろは圓明寺の里往還より十余町西の山林にあり本殿は
正一位小倉大明神 例祭は四月五日にして此わたりの産沙なり
毎歳四月二日に猿楽あり 京六条某氏より是を勤む
圓明寺は小倉山の南にあり本尊は薬師如来にして聖徳太子乃
御作なり當寺はいにしへ堂塔巍々として九條殿下光明峯寺道
家公の御創なり御子圓明寺摂政實経公晩年にをよんで父祖の遺
跡なれば此地に山荘を構て閑居しありし遂に此所にて薨じ
給ふ 御墳小倉のやしろの巽にあり
歸海印寺は下植野にあり宗旨真言にして本尊は千手観音 定朝の作なり
脇士は不動明王弘法大師の作地蔵菩薩は傳教大師の作なりそもそも當寺は
平家の代海印寺に平判官康頼丹波少将成経常に詣ておかく帰洛あり
らんまく當寺の本尊に祈り遂に感應を得しく赦免の宣旨に逢ふて其
成就ゆへ此寺を修しけるとぞ
勝龍寺の城あとは神足の東にあり 畠山右衛門佐義就これを築く信長記に曰く永禄十二年九月廿九日岩成主税勝龍寺の城に楯籠る

小倉明神




山崎
離宮八幡宮
寶寺ト
観音寺
八大天王
聖天



山崎 谷の観音

大山崎天王の社は素盞烏の御子八王子を鎮座しあり鳥居の額は小野道風の筆なり山崎郷中にて産神とす例祭は四月八日にて神輿三基あり

當社勧請の年代詳ならず神殿梁の銘に曰養老二年再興と書れ今猶あり天王山の城は文明二年山名是豊赤松一族上洛して此城を築く

観音寺は天王山の東半腹にあり真言宗にして佛殿の本尊は救世観音の立像聖徳太子の作也祖師堂には弘法大師の像を安置す木食以空上僧正中興して今の如く再建あり

當寺の客殿より淀八幡の風景眼下に遍て眺を備ふれ佳境なり

寶寺は観音寺の南にあり補陀洛山寶積寺といふ真言宗にして本尊は十一面観音の立像にして聖武帝行基大士の作也

堂内の賓頭盧の像も行基の作也庭上の宝篋

聖武帝の御塔也三重の塔なれ大日如来を安置す當寺の什寶に打出の小槌あり聖武帝の御宇龍神捧しなり

妙喜庵は寶寺の麓にあり禅宗にして本尊十一面観音なり千利休此所に住して二畳敷の囲を建る秀吉公折々渡御ありて茶の湯ありしとぞ

山崎の橋は桓武帝即位二年に是を造る中頃より淀の橋とかけて絶て無し今は舟渡しありて桂川の渡しといふ一の人家は南にして今は橋本是之

Sunchosai Nobushige Takahara, artist
Rokuemon Nagashima, Engraver
"Views of Kioto and Suburbs"
Printed by Tasuke Kawauchiya
Kiyoto, 1624-1643.

6 vols Vols 3-6, and duplicate
one of Vols 6 and Vol. 2 of
the second series
Vol. 2 delivered to Mrs. Rensselaer
June 8, 1922.

Two series were issued
1st series (6 vols)
2nd series (5 vols.)

In good condition (complete)
should bring #7 to #10

離宮八幡宮は山崎往還の中にあり鳥井の額は行成卿の筆なり社殿は八幡宮を崇奉りて社壇の下には石清水涌出る 左右に随身の像あり

然れば若宮のやしろ武内臣は末社の傍にあり 般若相承男山といふ

当社は貞観元年四月十五日行教和尚宇佐宮に詣で八月九日帰洛し山崎に至る時に村老出て和尚に対し去る七月十五日夜此地に神光あらはれぬ其所日輪のごとし又橘樹の木陰より清水わき出て異香薫ず行教これを天聴に達し勅を奉て清水を神と称し神殿を造営しぬしかるに山崎の

離宮の名は当社鎮座のむかし弘仁帝の御時の河陽離宮これより此宮室に移して離宮八幡と称す

天満宮の社 腰かけ石は此菅丞相筑紫へ左遷の時此所に休ひ給ふ所と云ふ 贈太政大臣

大鏡 君がすむ宿の梢をゆくゆくもかくるるまでにかへりみしはや

宗鑑法師の幽居の地は天満宮の傍にあり 宗鑑は足利義尚公の侍童にて俗称は志那弥三郎といふ 範永とつて連歌の誹諧を称して世に鳴る

関戸明神は山城摂津の国堺にあり此所に関所あり関戸院と号す今は 山中に閻浮檀金の像を安置す

町のなかにあり関戸町といふ 谷の観音は此町の南にあり